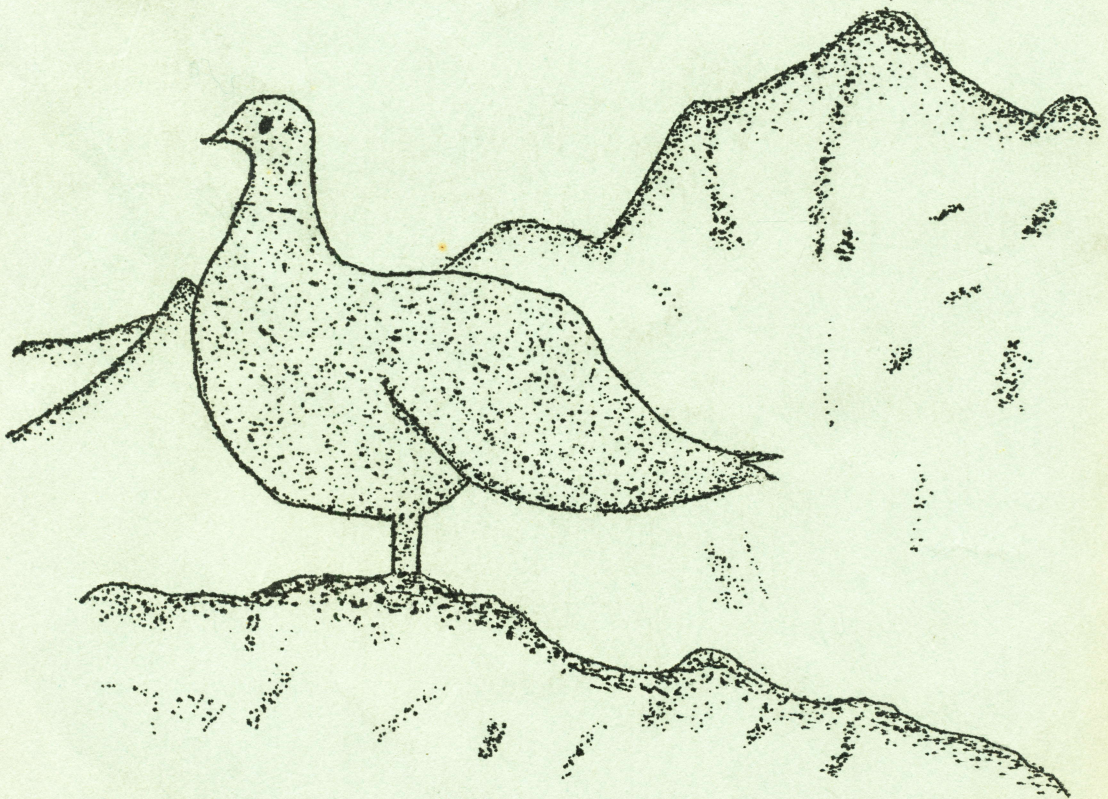


しだ

19

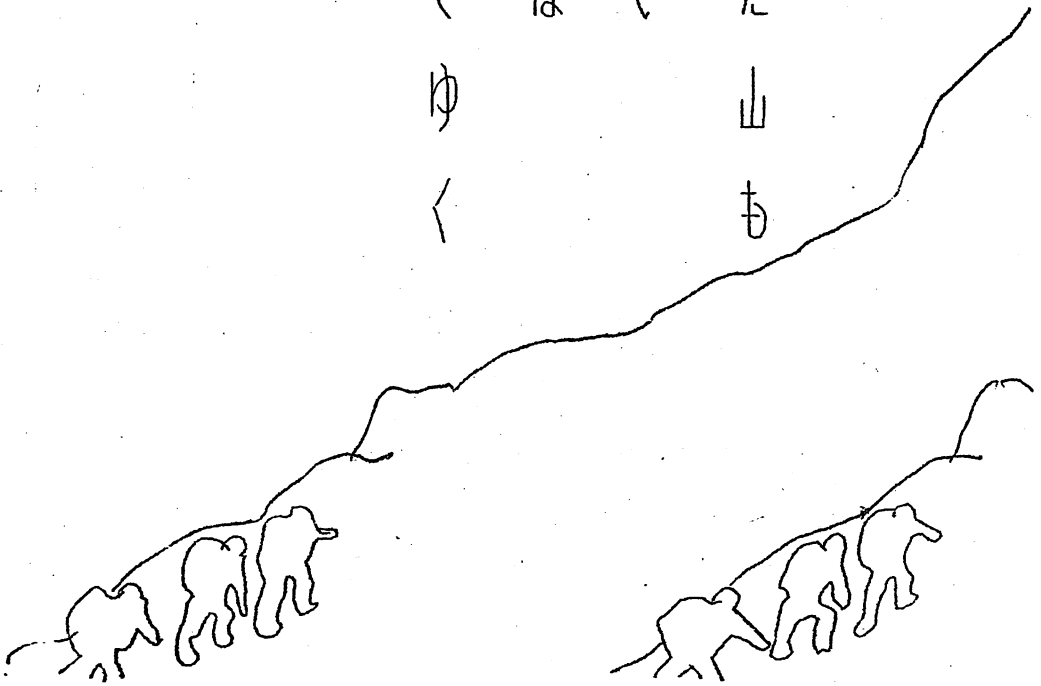
夏山特集



新ハキンヅワラブ横浜支部



山麓では
困難に見えた山も
登るにしたがい
その困難さは
しだいに減じてゆく





影山元芳

Ⅱ支部に一言Ⅱ

今年もいよいよ夏山プランを計画する
時になり、皆さんもあの山、この山へと
待ちこがれている事と思います。

支部の年間プランは毎年三月と四月の
例会でたてるが、夏山プランは必ずと云
ってよいほど決らない。何の拘束力も
もない支部で、種々の行事を実施して
ゆくには、相当の効力が必要なのである。
年々山行の撰採が違うので意見が分れ
るのは当然であるが、支部の主力が個人

しだ19号

目次

扉

巻頭言 Ⅱ支部に一言Ⅱ 影山元芳

2 1

夏山特集

夏山の思い出

中山一重

4

朝日連峰縦走

神谷和雄

5

白根三山

碓 清人

8

槍・穂高縦走

関野 昌

12

木曽御岳

中山一重

15

雲の平集中

(1)久保田治

16

(2)石井春男

26

(3)竹田 明

31

支部山行報告(45回〜50回)

支部に入会して

足立久子

37

山行主体に流れるのは一考を要すると思
う。何も夏山だからと云つて必ずしも高
い山とかアプローチの長い山に行かなく
とも会員の大半がまた新しい仲間が気軽
に参加出来るプランとすることが望まし
い。毎年同じような支部山行プランを立
てているようだが、そこに何か発展性を
含んだプランであつてほしい。今後の例
会でいろいろ話合つて行きたい。

今年の支部夏山プランは幸にも竹田明
氏の絶大なる御協力により、白根三山（
南アルプス）に決りました。多数の参加
で大いに楽しみましょう。



新ハイ4ヶ月	斉藤隆子	38
足跡	吉岡信子	40
雑談	佐次幸夫	42
これはいいいだ	竹田 明	43
詩		
山と人生	竹田 明	44
のんびりスワッツ子行（画も）	渡辺開代	46
三ツ峠	蒲谷弘子	49
北岳の想い出	鈴木国之	50
一つの山行	久保田治	52
山に関する章	吉岡信子	56
雑感	浅井俊明	58
大和路を訪ねて	今川勝子	60
青年時代	竹田 明	62
インタビュ		64
よせがき		67
会報受贈御礼		68
あとがき		68
表紙題字	沢野糸治・表紙カット	
文中カット	関野 昌	

夏の思い出

中山 一重

夏の思い出
出は一年
中山の山歩
きの中で
も一番思
い出深い
ものであ
る。
あの大
きなリュ
ックを背
負い得意
気になっ
て登る気
持……
初めて
の槍ヶ岳
に立った
時の感激
で胸が一

杯になったのも夏である。

可愛い高山植物、残雪とヨチ／＼歩きの雷
鳥の子供達、暑さなど忘れてこの一時をのみ
しめていたい。

五色ヶ原であつた黒百合の花、恋の花ロマ
ンチックで語りかけたいこの気持、星座の中
でのテントの一夜、人生論なども話し合つた
のもテントの中、思ひはつきない。

このクラブに入つて早や九年の年月が流れ
あどけなかつた私も人生をすねたような古理
となつてしまった、多くの仲間を得て今はそ
の人と山との思い出は数限りない。この九年
向を山に向けられた事は、なんて幸せ者なん
だろう。この幸せに酔つてゐる私に友人は「
山さん早く〇〇へお好きなように」して、い
いかげんに山と足を洗いなよ」と無情な事を
言つてくれる。〇〇は当分おあづけをして自
分の楽しみを求めてやまない。

東北の山

朝日連峰縦走

神谷和雄

東北地方は華やかな山は少ないが、一応名前が知られかつ登り甲斐のある山を挙げれば飯豊・朝日の両連峰がある。このうち飯豊連峰は四年前の夏に登ったが、朝日連峰縦走はその時以来の宿願であった。

昭和四十二年の梅雨明けも近い七月二十日過ぎ、I・Y両君と三名で夜行列車で上野を出発。翌朝山形駅で懐かしい蒸気機関車に乗換へ、山形側玄圃口の左沢駅に着いたのは七時十五分頃。バスの発車時刻まで大分あるのをタワシで行く。白竜登山口に着いたのは八時半頃で、バスで来るより二時間程早い。天気は快晴で非常に暑く、背後からカン／＼

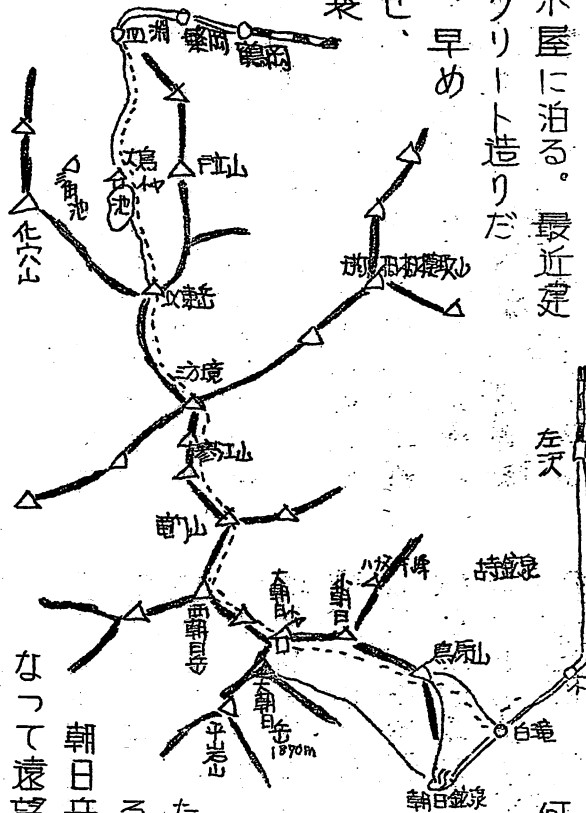
炙られる。最初は沢沿いに進むが、やがて山腹のブナ林に入る。寝不足、コンディション不調それに暑さでいささかバテ気味となり、歩はなか／＼進まない。冬期中崩れた登山道を地元の人達が整備している。全く申訳ない気持だ。快晴だった空も何時の向にか雲が多くなり、雨が降って来た。なか／＼止まず一時向以上も雨宿りをする。

やっと小降りになったので出発、鉾山小屋跡で遅い昼食をとっているとところへ、中年の地元の人が登ってきた。話して



いるうちに、この先の鳥原小屋の管理人であることがわかり、今日は大朝日岳附近まで行って帰宮する予定であったが、雨その他で大分遅れてしまったので、勧められるままに鳥原小屋に泊る。最近建てられたコンクリート造りだが、やや狭い。早めの夕食を済ませ、十九時には寝袋に入った。

翌日は深夜の二時に起床し三時に出発、荷月が取々と輝く中を、涼しき手伝って快道に歩く。鳥原山を過ぎる頃から明るくなり、小鳥が朝の訪れを告げる。あれ程輝いていた月も太陽の前には抗する術もなく、天空に淡く浮くだけの存在にな



ってしまった。それから若干のアルバイトで前衛の小朝日岳に着く。目前の大朝日岳はY字状の大雪渓を胸に抱き、その北方に中岳

西朝日岳から以東岳に至る山々が何れも豊富に積雪をまとって我々を招いている。天気は良いが雲が多く、遙か彼方に月山が見える程度で遠望はきかない。曾って登った飯豊連峰の見えないのが残念だ。小朝日岳から一旦下り、暫く登った三叉路に新旧両朝日小屋がある。小屋から一登りで待望の大朝日岳頂上だが、先刻より雲が多くなって遠望は殆んどなくなる。案内書によれば頂上附近にはヒナウスユキ草の大群落があるとのことだが、見当らずばかりする。小屋から僅かに下った金玉水で朝食をする。炊きたての米飯と味噌汁は非常に美味い。つい喰べ過ぎて動くのが嫌になり、出発が大分

遅れてしまった。気づかれた天候が悪化し、最初は遠く小さかった雷鳴もだん／＼近づくと共に大きくなり、中岳を過ぎる頃から激しく雷雨になった。この附近は落雷が多いというので歩を速め、西朝日岳手前の鞍部でキスリングの上に雨具を被りうづくまる。雷が前後左右で派手にピカ／＼ドン／＼やっついていて、気が悪い。一時雨程でやっと止んだ。すぐ下の雪爨から吹き上げる冷気のため、身体のはたまで響くなり早々に歩きだす。竜門山——寒江山を過ぎる頃から又天候があやしくなり、三方境で再び降って来た。今度は休まづ雨の中を進み、狐穴小屋に逃げ込む。挟い小屋は先着で荷置だ。小屋前は絶好のキャンプサイトだが、下が濡れていてテントは張れづガツカリすると共に、この夕立には全く参った。

然し夕食が終わる頃から晴れ上り、以東岳

川竹の



の彼方に沈む夕日が非常に綺麗だ。

三日目も深夜二時に起床、皆寝静まっているので起こさない様に出発。昨日同様満月が素晴らしい。写真に撮ろうと思ったが、どうしてもシマツターが切れない。明るいようでもやはり月光では無理のようだ。然し懐中電灯も不用な程、足元を照らしてくれる。太陽が昇り始める頃朝食、この附近は大朝日岳より高山植物がずっと多い。入る人の少いせいだろうか。苦しい登りを頑張ると本縦走の最後のピーク、以東岳に着く。ふり返れば辿つて来た山々が小朝日まで全部見える。我ながらよく歩いたものだと感じする。前方足下には朝もやの中に大鳥池が静かに横たわっている。以東岳からの下山路は、最初は草原の道だが中途から灌木帯の急峻な溝状の道になる。登りの時或は雨の時は非常に難儀しそうだ。急降下一時雨余りで大鳥池南岸に着く。ここから東側を半周すると大鳥小屋だが、この道

もうすっかり足を滑らそうものならたちまちドロブツというなかくの悪路である。小屋附近の日陰で昼食し、大休止。小屋から大鳥川に沿っての下りもなか／＼辛い。急激に下ってから又登りがあって、疲れた身体には全くこたえる。飽き／＼する頃、やっと林道に出た。案内書によればここに砂防事務所があつて、依頼すれば電話で車を呼べるとのことだが、目的の砂防事務所は現在ない。バスの発着所がある繁岡迄は、歩いたら三時間ばかり

あるだろう。途方に暮れていると、東京から車で来ていた釣師がキャンプをしていたので交渉し、繁岡まで運んで貰った。清涼飲料で喉を潤し、豆だらけの足を水で冷やした後、最終バスで鶴岡へ出る。夜行列車まで大分時間があるので寿司屋に入る。無事縦走の祝盃をあげた。何本かのビールと新鮮な魚、寿司を腹一杯喰べて三千円とは誠に安い。満足感と疲労で夜行列車も苦にならず、帰途に着いた。

スプルース山

白根三山

碓

清人

八月十八日午前6時、北岳登山口広河原で甲府からのバスを降りる。寝不足の為か頭が

重い。見上げれば、大樺沢の雪渓が昇ってまもない太陽に白く輝いている。しかし北岳山

頂付近はガスっており明白ではない。野呂川にかかる吊橋下付近で、朝食をとった後出発。大樺沢分岐を左に見送ると、いよいよ樹林の中の急登となった。なげか調子がです。数歩登っては休み、又数歩登っては休みをくり返す。

後花のパーティーが、僕を抜いてゆくが、抜き返してやろうとする気も起きない。この山行に

誘った山友達のK君が「北岳なんて

かったるい山は

いやだ」と尻

ごみした為、

やむなく単

独行になったが

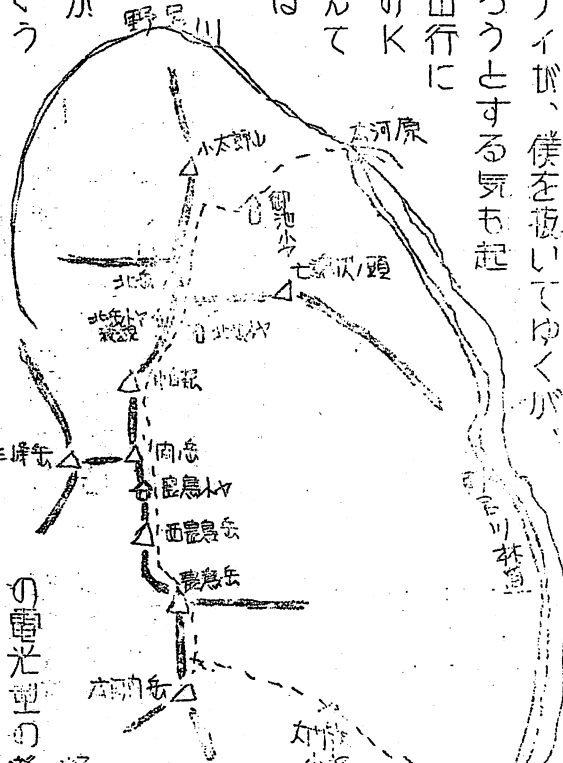
まったく役のい

通りだ。その内やや調子もよくなり、

余り休むこともなくなり、白根御池小屋へ着

いた。白根御池などという名から清水がコン

コンと湧き出ている澄んだ泉といったイメー



ジを持っていたが、実際は泥だらけの濁った水たまりな様なもので、水すましが泳いでいた。四十名程の登山者とその周辺で休憩していた。池の向うには二週前程前に登ったばかりの四風三山が望まれた。そこで三十分程休

んだ後花、お花島の

中の急登、元花した

名工大のワネルの

パーティーを追い抜き快

適なペースで登る、振り向け

ば、はるか下にさっきの白根

御池が小さく見え、手前の樹林

の中を、名工大の赤いシャツが

動いている、二時間程で小太

郎屋根斜面の、通称「草すべり」

の電光石火の登りにかかった。ペースは次々に

落ち、この頃は登りはじめのそれとほぼ同じ

か、それ以下のものになってしまっていた。

この付近からは深くガスがたちこめ展望は、

全くなくなってしまう。そのガスの中で、

色とりどりの草花が、咲いてはいるが、一つ一つ手にとって鑑賞する余裕はなかった。小太郎尾根の稜線に、必死の思い出たどり着けば、急に大きく眼の前が開けたが、ガスの中にぼんやりと、小太郎山へ続く稜線が見えるだけで、その先の展望は皆無。金属製の指導標の前で実際には何も見えないが、仙丈岳方面を見ながら大休止。寒くなったのと、近くで休んでいた男性三人パーティが出発したので、僕も出発。カレキとハイマツの尾根道を行くと、北岳肩の小屋の前へ出た。先行の三人パーティは、ここに泊るらしかったが、僕は時間的にもまだ早く、又ヒツチもさっきの大休止から大部上ってきたところなので、小屋の脇で十分程休んだだけで予定の北岳小屋へ向った。岩角につけられたペンキに導びかれ、両俣小屋から上ってくる道を右に合すと、めざす北岳山頂は一登りだった。富士山に次いで我が国第二の高度を有する北岳山頂も、あいにくのガスで展望は全くなく、ただ

フリキのカバーが破れ下のコンクリートの北を覗かせている宝剣らしきものと、北岳山頂三一九二メートルと書かれた標中が、立っているだけだった。山頂の岩の上で休んでいると、いつのまにか寝てしまったらしく、寒くなつて起きると、ここへ着いてからもう一時向もだつていた。あわてて出発。北岳小屋は水場が北岳小屋まで下らねばならぬ非常に不便だと聞いていたので、稜線からダケカンバとハイマツの急斜面を、北岳小屋へと下つた三十分程の急下降で、やっと石造りの北岳小屋へ着いた。しかし小屋は非常に荒れており、おまけに無住。これではとつてもここに泊る気などにはなれない。しかたなく今下つてきたばかりの道を又稜線小屋へと登った。「最初から稜線小屋へ直行しておれば……」と、悔まれたがこの頃からポツリ／＼と雨が降り出し、ほう／＼の態で北岳稜線小屋へと、飛びこんで。小屋ではやはり水が不足しているらしく一人／＼に水の割当があり、日炊で

一人四〇〇ＣＣだった。雨水を消毒して用いているらしくクレオソートの臭いがした。

翌十九日 小雨が降っており昨日にも増して、ガスがたちこめていたが五時四五分小屋を出る。道は岩峰を縫うよう

にして続き、岩には所々に、赤いペンキがつけられている。

それらの岩の向々に淡青色の

岩ぎきような花が、ひっそりと

咲き乱れていた。それが中白根

のピークが判明しないうちに、向の岳に着い

てしまった。この一寸と手前で、初めて雷鳥

を見る。親子連れの三羽だったが、余りきれ

いな鳥ではないと思つた。向ノ岳山頂は、ガ

イドブツクによれば玄々としており、又大き

な雪田もあるとあつたが、それほど広いとは

思わなかつたし又雪田も、この季節では、足

にまみれたきたらしいのが、二メートル四方

程度残っているにすぎなかつた。この付近が



らは、太陽が時々雲の合い間から顔を出すよ
うになり振り返れば、北岳のピラミタルな
姿が又前方には、これから登る豊鳥岳が導ほ
んやりと見えた。向ノ岳からは、岩屑だらけ
のガラ／＼した道を豊鳥岳との鞍部にある豊
鳥小屋へ向つて下る。その小屋で三十分程
休憩した後西豊鳥岳の登りにかひつた。下か
ら見た時はかなりな急傾斜で、これから登る
かと思ふと、いやになつたが、それほど
とでもなく西豊鳥岳に着いた。この向の登り
では又もや、三羽の親子連れの雷鳥に出合
つた。今度のは、僕の眠の前の道を、チヨコチ
ヨコと通り過ぎていった。西豊鳥岳では、一
寸立ち止つた程度で、次のピーク豊鳥岳へ向
つた。豊鳥岳山頂上は、丁度スポットライトの
光が当っており、暑くさらに豊山シーズンも
終りに近い今頃では、一夏分のゴミが、山頂
付近の至るところに散乱し、それがおりから
の日の光に、照らされ悪臭すら放つていた。
ここはこの縦走における最後のピークである

為か、皆ここで大休息をとり、そんな誤で、
 こんなにゴミが残されているらしい。そんな
 山頂には長居は無用と早々に下山。再び来く
 たちこめているガスの中を、岩角につけられ
 たペンキの丸印をたどってしばらく行くと、
 大門沢下降点へ出、そこから樹林の中の急
 降下となつて、もう三〇〇メートルの急登
 とはお別れであつた。しかしこの下降は急だ
 った。しばらく登の先まで着く様な下りを続
 けると、天音が聞えはじめたが、音はするが
 なかく、河原へは着かづいいかげんいやにな
 った頃、やっと河原へ飛び出した。そこから
 今後の泊り大門沢小屋までは直ぐだった。

北アルプス

槍・穂高縦走

関野昌

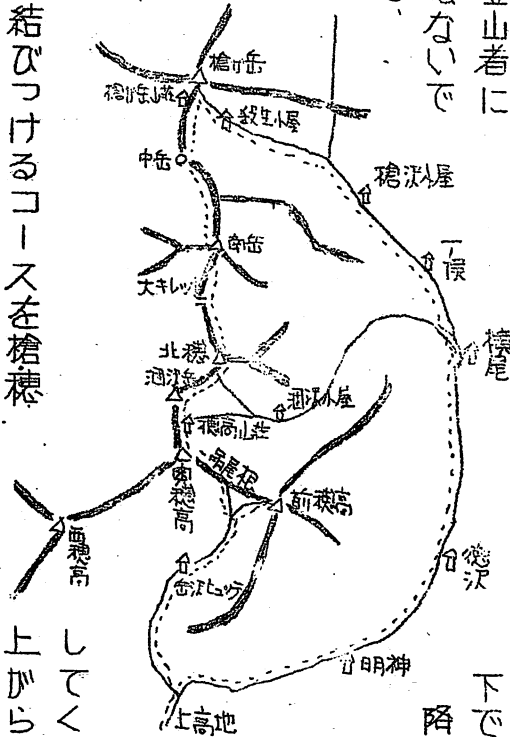
翌二十日 空を見上れば昨日までの天気、
 毎まれる様な快晴。河原を歩いたり、山腹を
 まいたり、小さな吊橋を幾つか渡るともう雪
 登道路へ出た。ガイドブックでは大門沢の小
 屋からここまで約四時間とあつたが、そんな
 にはかからなかつた。もつとも後から、ハイ
 パスで追いついてくるパーティに抜かれま
 いとして僕もとびしたが奈良吉田では予定より
 も早く着き、バス停前には大分向があつた
 ので、バス停前の旅館で一風呂浴た後バスで
 身延へ出、東海道経で帰宅した。

(昭和四十二年八月十八日—二十日)

北アルプス連峰の名山として君臨する槍ヶ岳は、その山容がどこから見ても槍の如く尖っているところから、一番誰にでもこの山の姿は印象深く又北アルプスの山多しといえど、これほど登山者に親しまれている山はないであらう。又穂高岳は、

西穂高・前穂高・北穂高・奥穂高と一連の山の総称でその山容は槍ヶ岳の左に雄々しく岩峰をたつらねている。

この槍と穂高とを結びつけるコースを槍穂の縦走といいう千川級の山々がこの座もひしめきあっている。



流を流しての観望である。ポンチヨを着て出発、横尾まで何とか行けるだろうと考えながら歩く。明神を過ぎると人とは大分遠くなるが雨はだん／＼と強くなる。徳沢小屋の軒

下で一休み、横尾に着く頃雨は小降りになる。一俣に着くと雨

は止む。槍からの下山者も多くなってくる。槍沢小屋まで

快調、ここで昼食小屋の中

に入つて休む。槍沢小屋を

出てしばらく行くと雪災が

出てくるところから傾斜が増

してくる。夜行渡れもあつてか足が

上がらない。やつのことで槍ヶ岳

山荘に到着。空も晴れ上り富士山が

見える。三年前に来た時よりも小屋は空いて

いた。

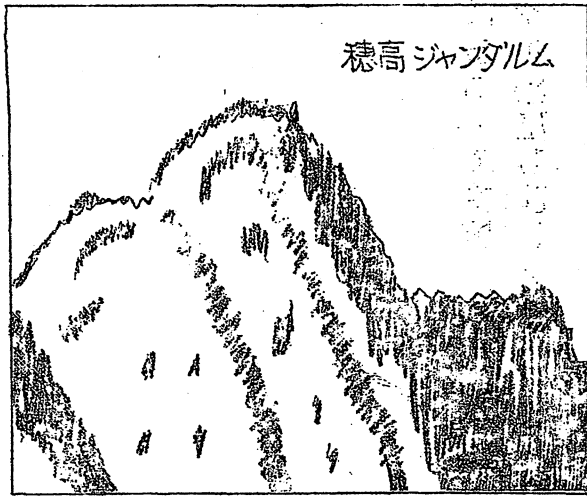
昭和41年7月30日 中央線は例のごとく超満員、でも運よく座れ松本へ 松本より合乗りのタクシーで上高地に入る。上高地の空は

二日目 4時30分起床、5時15分出発。

朝は寒い、風が強い、大喰岳・中岳と過ぎて

中岳直下の水場で一休み。雪溪の下の水は冷たくて気持ち良い。大分穂高方面に行く人達がいる。大喰・中・南岳と三ヶ峠の稜線漫歩である。南岳よりいよく難関のキレットの下りである。その向うには北穂高が城壁のようになり立ちふさがっている。キレットは危険なところには、はしごがかかっている。必配してたほどではない。緊張感の連続で北穂の登りとなる。右手の滝谷では、20人位の人々が岩場に取りついていて、空には雲一つなく、遠くには日本三名山の加賀の白山が雲海の上に浮んでいる。北穂頂上でパチリ——と写真撮るの忙しい。北穂を後に下ると左に南稜の道を分け、雪溪をトラバースし岩尾根づたいに行く。足下には涸

穂高ジャンダルム



沢のランにが色とりとりできれいだった。太陽の暑さが身にこたえてきた。ときおりヒンメリした風が吹いてくる。なによりのゴチンウだ。涸沢岳の登りで大分落石の音がする。ガ

きみな音となって南へこえる。涸沢岳最後のクサリを伝うと山頂に飛び出す。目の前にはジャンダルムが目に入る。時間は早いがこの下の穂高山荘に泊る。夕食は茶碗に五杯食べる。おどろいた食慾だ。夜になるとつめにつめられる。

三日目 快晴。五時五分出発。奥穂の最初の登りでつかえてしまう。朝の奥穂は混んでいる。奥穂から面穂の道を右に見送り左の吊尾根を行く。このあたりイワベンケイ・ミヤマダイコン草等石の間に咲く高山植物が咲いている。前穂の登りは急険である。前穂の頂はケルンが立ち並んでいる。30度の大展望を満喫し、

下山にかかる。転るように岳沢にユツテまで
一氣に下る。このあたりは白樺に囲れ正面に
は上高地・焼岳・乗鞍が見え背後には吊尾根
を背負いなか／＼良いムードのところである。

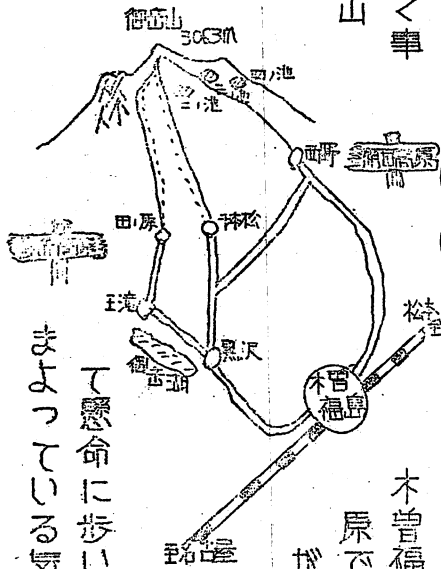
それに空は青く澄み、すい／＼まれそうであ
る。こんなところに一日ゆつくりのんびりし
たいなあと思ひながら上高地目として下った。

木曾御岳山

中山一重

木曾節で有名な御岳山に行く事

にしたが出発前にK氏から「山
さん愛中なんだろう。御岳さ
んなんか行っちゃいけない
よ。あの山は荒神様でた。
りがあるからやめときなよ」
と忠告を受けたががまいっこ
ない行っちゃえ……



木曾福島からタクシーで七合目田の
原で下車する。目前に御岳の山頂
がまぶしい位によく見える。石

碑・鳥居と信仰の山そのもの
である。白装束の信者・身
体の不自由な人が願いを込め
て懸命に歩いている。なにか幻の世界をさ
まよっている気がする。山頂に近づくにつれ

てガスが多くなり山道をはずれた所には遅い
高山植物が最後の花を咲かせている。見とれ
ていると小屋のホツリが通過して行く。声を
掛けて今夜の宿の値段相談干二百で差札、二
ノ池小屋に泊る事にした。せうと決つたらあ
と一息山頂に立つ事が出来た。王滝口山頂、
生憎のガスで展望の、少し道に迷つたりし御
岳山頂三〇六〇米に着いた時は大雷雨も強く
なり名物雷がゴロ／＼やりだした。太つてい
て気の弱い私は時計をポケットに入れて金歯
は口を閉じてどうにか我身に落ちてくるのを
ふせぎ日頃遅く歩く人脚この時にはまったく
マランソ選手並の下り方をしたのにはびつく

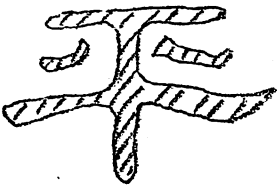
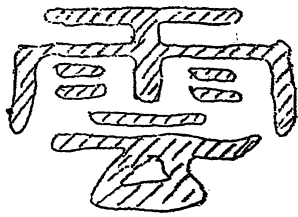
りした。

ビッシヨめれで二ノ池小屋にたどりついた。
稻妻の音、雨の音すさまじく鳴り響いてい
る夜は五氏の三千米征服を祝い水増しの地酒
で乾杯、小屋番も仲間入り賑やかである。

二日酔の頭でフラ／＼水増しをのこすつて
を許したのがいけなかった。冷い雨を頭に受
けて黒沢口に下る。日曜とあつて登山者は少
い。六根清浄お山は晴天。なんてのんびり
した事を言っているが頂上は雨なのにお気の
毒様、なんのたたりもなく無事下山帰りもタ
クシで本曾福島までノンストップ

昭和八年八月十五日

スアル北



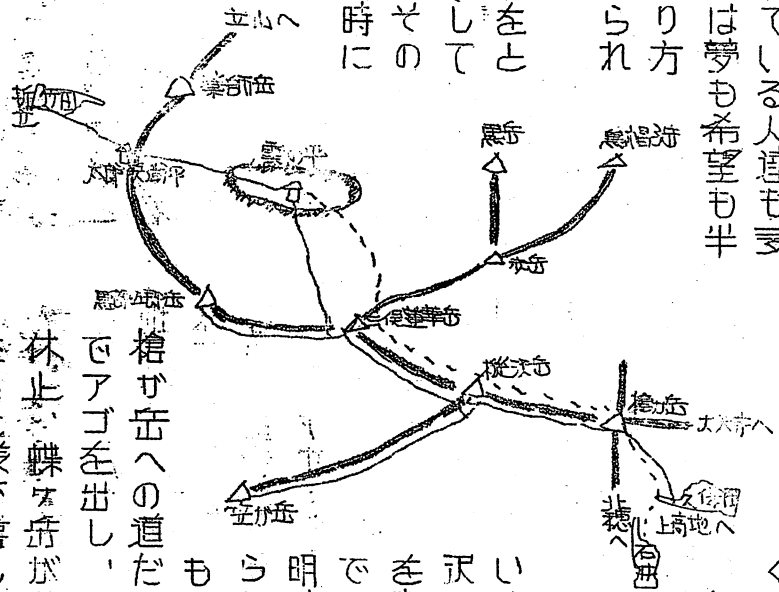
集
中

- ① 久保田 治
- ② 石井 春男
- ③ 竹田 明

北アルプスには無限の夢があります。しかし夏の北アルプスに失望されている人達も多勢います。確かにあの箱路には夢も希望も半減させられますがコースのとり方によってはまだく満足させられる所が数多くあります。

無理して八日間の暑中休暇をとった私と、私のカミさん、そして大学生の通称坊やこの三人はその夢を実現すべく梅雨明けと同時に飛び出しました。そしてこの山行の最も大きな楽しみは太郎を越えて富山県からは槍を越えて長野県から、私達には笠を越えて岐阜県から雲の平で愉快な仲間が集まろうと計画した事です。

先ずその山旅にふさわしく北アの正面玄関上高地から入山する事にする。何度目かの上高地だが一昨日まで雨が降り続いたとの事で



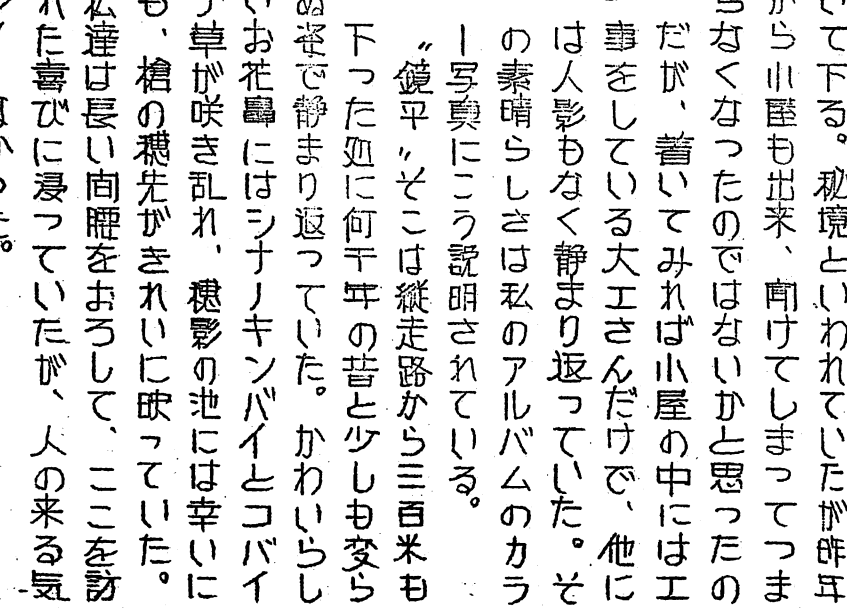
梓川の水壁の多いのに驚かされる。あいにくと雲が低くたれ込めて期待した穂高も見えずションボリしたバスの運転手さんの

ずーっと雨続きだったからもう種も切れるよという声にいくら慰められる。今日は槍沢小屋迄だから上高地で絵葉書を書き、明神池で遊び、穂沢園で昼食とのんびり道中を楽しむ明神までは行き交う人も結構見られたが、それから出会う人もぐっと少く、夏山とは思えぬ槍ヶ岳への道だ。槍沢小屋迄あと一息の登りでアゴを出し、ニッコウキスゲの咲く道で大休止、蝶々が夕日に映え明日の天気は約束された様で嬉しくなる。小屋の夕食が玉手井とは数年前とは何処の小屋でもカレシムくめだったのにと感心させられる。でもうともうはかけらも入ってなかったが、

朝起きてみたら昨日の夕焼けも空しく強い風と雨。予定では氷河公園から南岳至由檜ヶ岳だったが、あつさりと変更して槍沢直登ルートにする。雲がドン／＼走り肩の小屋に着けは用も上り常態も姿を現わす。朝食に小屋自慢の特製うどん金百円也を喰べる。味はともかく量の多いのには少々又食見置味の私と坊やは助かった。而録尾根を一気に下る。時間の関係だからであろうか、過去十年あまり毎夏のように北アルプスに放浪している私にとって、この稜線があまりにも静かなのに驚ろかされる。北鎌尾根の良く見える所で休憩している二人連れのパーティーに合う。剣から縦走して来たとのこと、私達は黒部五郎の小屋が南にいてるかどうか心配だったので早速聞いてみると「いやあ非度い小屋だ。ふとんはカビくさいし喰物も悪いなあ。そのくせ小屋代は最高だよ。なにしろ休憩のお茶代が八十円。水が小屋の前にザブ／＼流れている」というのだよ。これを聞いた私達は余計

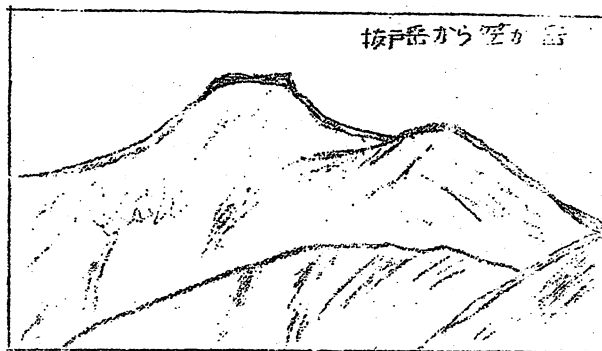
黒部の小屋に興味を覚えた。なにしろ今回の山行は黒部の山賊で知られる鬼室さんが小屋番をしているというので、カミさんなどは山へ登るよりもその小屋に泊りたいのが本心で来たのだから……。樺沢岳はそのピークを何度もだまされてやっと着く。今宵の宿泊地双六小屋は目の下だった。双六小屋は何度来ても気が持が良い。私達も含めて十人に満たない登山者とガランとした食堂で夕食を共にする。アザミの天ぷらがことのほかおいしかった。

入山三日目。昨日とはうって変った快晴。小屋の中から御来光を拝し出発、双六池へ僅か行った所で何年振りかであろうか。夢に逆見た笠が岳を見る。思えば笠が岳に向うのは何度目だろうか。常念から、薬師から、雲の平から。その縦走の最後に念願の笠へ登ろうと足を運び、その都度天候や体の故障などで下山した残念さが、今日やっと報われると思うと感激もひとしおである。



を張ったりして、全く興ざめだが、ここでは馬に喰わせてもとても喰いきれない。スケールで咲きほこり、全く圧倒されてしまった。そこから一時向も行くと小高い原っぱに出、お花畑の中を一条の水が流れている。鉄父平だ。カール地形で中央アルプスの千丈敷を少さくしたような所だ。スケールこそ小さいがその静かな事、青手な事比べるべくもない。そこでレモンティーを沸し、槍や穂高を正面に眺めながら心ゆく迄昼食にする。北アルプスのこんな美しい所に、誰も通らないのが全く不思議だ。カールをつめ上げてハイマツの向をしばらくジグザグに登るとへそこは丁度甲斐駒の九合目あたりの感じを思い出させた。稜線に飛び出す。空が岳が目前に屹立し思わず歓声を上げる。頂上に乱立するケルンが人影のようだ。抜戸岳の腹を巻いて岩塔が立っている向をくぐり抜けるとへそそれは笠ヶ岳の石門を思わせた。もう笠の一角であり、小屋が目前である。小屋には昨夜双六小屋で同宿

した男性三人のパーティーしかいない。彼等は今日槍見温泉へ下る予定が、あまり気持の悪い小屋なので沈没したという事だ。夕食のあと日没を更に山頂へ登る。最近では未知の山頂といふ事もなく、こゝでは異歩の足取りしく、自のを止め別に大変づかしいないが、憂になるこがれてきたのだから。山へ行く人にそれぞれ心の山というものがあるならば、私は北アルプスでは、断然笠をおいて他にない。昔文を越すケルンが乱立する山頂に立てば、カミさんの



つても別段感
いう事もなく
まったが、こ
った。一歩一
が只無性に驚
然に早くなる
ようがない。
さついかと
という山では
私にとつては
と、笠に恋い
何年向も過し

顔も夕日に照らされて、その感激に酔うように上気している。そして夢中で槍が岳初登頂者播隆上人が奉った仏像を捜す。「あった。あった!!」と声を上げる。それは三十糎位の青銅の仏像であり、小さな祠にひっそりと安置されて御座る、私達は念願がなつて、無事ここへ登れた喜びと、今後の山登りの辛多かる事を願つて、手を合せる。しばしのお祈りをすませると、今度はケルンを積む。それは何度かここに登ろうと共に苦勞して、今日一緒にこれなかつた友の名を、その石の一つ一つに冠しながら、一つきりすべき事を終えようと、ドツカリと腰を降し、アルプスの山岳展望に最も幸福な時間を送る。ここを南山されたのは円空上人であつたが、その後播隆上人が登り、槍が岳を拜し、伏し拝んだという槍岳は、確かにここから眺めて大自然の刻んだ仏像という感が強く、真度殊照に黄金色に輝き、その荘嚴さはたとえようもない。又槍から続くスカイラインは、正面奥穂高岳を

頂点として大岩壁が連なり、ギザ／＼の西穂からぐっと落ちて、焼岳や西洋のお城を思わせるように一つ孤立して、不気味な感さえ思わせる。膨大な乗鞍も今は静かに暮れていく、遙か西方に、幾重にも重なりあつた雲海の彼方に、今日の佳き日の太陽が、音もなく沈んでいった。夜小屋のバイトさんに、遊びに行つてもいいですかと言われ、どうぞと言っておいたので、片付けものを終えんと、お茶を持つて上つて来た。立命館大学のワンゲル部二人と小屋のオジサンの三人、最盛期でも登山者が少いらしく、一夏三人で充分だそうだ。宿泊者は私達三人一組のパーテイしかいなかったの、皆で歌つたり、山の話に興じたり、本当に旅行く人だけが知る心の触れ合いを感じ、夜更け迄忘れ得ぬ一夜を過した。

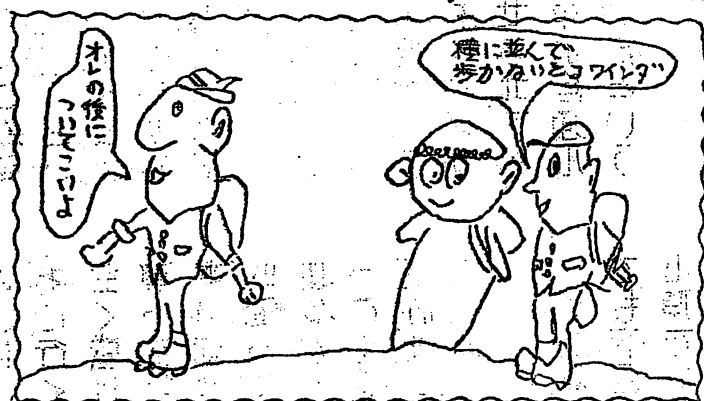
「日」出よしとカミさんに起される。途端に「しまった!!」と飛び起る。日本一といわれる立山頂の御来光にはこれからでは間に合

わぬだろう。昨夜遅く迄起きていたのが、さう
っぴり極やまれる。すぐカノヲを構えながら
寝床で御米光を拝する事にする。一瞬槍・穂
高の稜線が黄金色に光り輝く。それは頂度稻
妻のように、その敬虔な光景に、思わずシャ
ッターを押すのも忘れて眺め入る。それはほ
んの僅かな時間であつたがそれから直に槍の
左・連華岳の山頂あたりより日の出が始まっ
た。笠の小屋を後にして双六小屋に向う。小
屋にいる人達全員の見送りを受ける。私達は
何度もくく振り返りながら「さようなら」
をいうと、その度に手を振つて答えてくれる。
そしてそれは遙か彼方に小さく見える迄続い
た。双六小屋で昼食にしていると肺然たる夕
立に見舞われる。その雨をやり過ぎし三侯連
華岳へ向う。山腹をたどる道は残雪と、お花
畑と、グリーンのカーペットを敷きつめたよ
うな所で、何度通つても楽しい。三侯連華へ
の最後の登りはきつく、やつとの思いで午後
五時山頂に着く。先程の夕立でカラリと晴れ

上ると思ひのほか、相変らず雲が深く、長野
・岐阜・富山の三県分岐点のこの頂の展望も
期待外れに終り、今宵の宿泊地黒部五郎山屋
へと向う。少し下ると突然、バカでかい雷鳥
が目の前から飛び立ち驚ろかされる。いつも
だと珍いから追いかけるのだが、今度ばかり
はうんざりすると共に、不吉な予感におそわ
れる。(雷鳥を見ると夕立に降するといわれ
る)。その予感通り、五分もたたないうちに
ザーとくる。時間は六時頃だが厚い雲の為見
通しがかさず、時折鳴り響く雷鳴に生きた心
持もない。坊やが休もうと言うが、この稜線
では逃げ場もなく、しやにむに下るより他は
ない。只もうケルンと踏み踏だけが頼りであ
る。三人一列で並んで歩いていたのが、ラス
トを歩いていた坊やが、いつの間にか、カミ
さんの横になつて一緒にくっついてゐる。カ
ミさんもういつもの威勢はどこへやら、今にも
泣き出しそうだ。私も只「落着いて、オレの
後を離れては駄目だぞ」とどなるだけだ。小

広い台地に出ると、道はケルンに導かれて、ハイ松の向をダイレクトに下っている。しか

しその道もこの雨で泥水が濁流となり、流れ落ちていく。覚悟を決めてジャブ／＼と、その中を水と一語に下り落ちる。その間もこれは水の通路であって、縦走路から外れてはいないかと不安な気持ちにさせられる。万一道を間違えた場合、登り返す余力があるかどうか、リッロン製のポンチヨを被っていた私はこの強い雨でとうに全身ビショぬれ、おそらく二人ともズブぬれに達しない。日暮も近いし、このまま夜に入れば懐電も使えないだろうし、疲弊凍死にもなりかねない。今迄読んだ遭難の事が色々頭で浮ぶ。確かに道とはとても思われぬ程悪い所であつた。一あとで鬼屋さん、ここは旧道でもつと良い道を作つてあるという事だつた。水の流れるの中を泳ぐように



下っていると、雨の中に五郎小屋の赤い屋根が見える。この時の気持、書きようもない程嬉しかった。ビショ／＼泥々

になつて五郎小屋の戸を叩けば小屋の主、鬼屋さんとバイト学生二人だけで、もう今日は泊りの人もあるまいと夕食の最中であつた。手持不沙汰のバイトさんとしては、二こで大いに張り切つて、ロープを張り、雨具や衣類を干してくれ、我々だけの食し切り小屋の有難さを感じみじみと味わつた。そしてこの雨の中を苦労して、はる／＼アルプス最奥といわれるこの小屋へ訪れた喜びを、重たいふとんの中で感じるのだった。『ゴハン出来たよ』という声に起きると、我々の隣で寝ていたバイトさんもう一緒に起きだす。どの小屋でも、バイトさんは早く起きて朝食作りに大変なのだ

が、ここでは小屋のおやじが作り、バイト匠は我々お客と一諸に起るどいうように大変のんびりしている。いかにも小さい小屋だし、勿論ランプであり、なにか一昔前のアルプスの山小屋そのままという感じが、丁度こんな風だろうと思わせる。鬼窪さんの部屋へといつても二帖位で台所兼用、隅にふとんが積んでありとても部屋と言えたものではないかしには埋の段が何枚も吊してあり、鬼窪さんはイワナを釣るケバリ作るに懸命だ。

五郎平の朝は小鳥の声で始まる。コバイケ草の咲き乱れる五郎平は、あちこちに池糖が屢在し、笠が岳が正面に端正な姿を見せ、反対側に薬師が、そして目前に黒部五郎岳がのしかかり、全くこれだけ雑踏を見せる北アルプスに於ても、近年太郎平↓雲の平の直通路ートが屢けた為、ここは取り残されたという事、全く喜ばしい限りである。

今日はカミさんは洗濯デーとして小屋に停滯、私と坊やで黒部五郎岳へピストンにする。

超天にしても薬師にしても、カールというのが大きい過ぎてピンときにくい加、黒部五郎のカールというのはその点、最もカールというのにピッタリとしている。勿論スケールも大きい加、岩と花々と、残雪と流れる清水が、奥に行くに従い適当に現われ、登りの疲れを全く感じさせない。超特大のキスリングを背負った単独行者に行き合う。只会釈だけしてすれ違ふ。つめを一向に肩迄登れば太郎平から登ってくる道と交わる。そこから頂上迄はほんの一投足であつた。大きな石が重なり合つて山頂を形造っている。黒部五郎とは人の名前からとつたのではなく、黒部にあるグーロの山、即ちグーロとは山中の岩場という事であり、グーロが五郎になまつたので、まさしく黒部五郎岳であつた。そして北アルプスでも不遇な黒部五郎岳にふさわしく二人丈の山頂であつた。残念ながら霧に包まれ何も見えなけれど、ただ山頂に腰を降しているだけで満足だつた。赤れゆく時向を気にせず、

いつまでもいつまでも霧の晴れるのを待って
坐っていたが、雨になってしまった。五郎平
から山頂迄道はカールをとるものと、稜線へ
行くものと二本あり、帰りは稜線をとる必
ずだったのが、カールの道があまりにも素晴
しかったので、どちらともなく二人共カール
の道を引き取した。小屋へ戻ると先程合った
単性さん。今日二こでお泊りだという。話を
聞くと九州から国内遠征、一ヶ月の予定で先
ず剣から穂高への途中だそうで、又上高地か
ら大滝へ蝶々を走破する由、うらやましい
限りである。なにしろアルプスという事で心
配だから、いろいろとザックにつめ込んでし
まって、天幕迄持つて動きが取れない状態ら
しく、明らかに積載量オーバーだ。我々のサ
ックでの山行がえらくうらやましく感じ
たと見え、あんまり心配する事もないなあ、
今度は絶対サックで来るわしと嘆息する
事しきりであった。天幕を持っていても五色
ヶ原で一度張っただけ、あとは小屋泊りで来

たし今後もし小屋泊りの予定とあつては天幕も
泣かうというものだ。(翌日役が出て行った
後には、太いローソクと靴墨が忘れてあつた。
靴墨迄御自参とは誠に恐れ入った次第である
が、案外意識して置いていったのかも知れな
い。) しかし山の美しさ、スケールの大きさ
はさすがアルプスで九州の山とは比べものに
ならないと、えらく感激していた。他人事と
はいえ一年の有給休暇を全部こぎこんできた
その情熱に報いられた思いに嬉しく、その山
行に幸多く、無事であれと祈らずにはいられ
なかった。

入山六日目、今日は皆と雲の平で会える
と思うと何となく嬉しい。快晴という事もあつ
て足取は余計に軽い。五郎沢を下り、黒部源
流に出て祖父沢を溯行して雲の平に登るのだ。
辛い鬼窪さんが岩魚釣り、祖父沢迄送って
下さるという事で、一般ルートでなくたしよ
うの不世があつたがこのコースをとる事にす
る。鬼窪さんは、ヒョイ／＼と岩魚を釣り

釣り行くのだが、私達はそのスピードについて行くのが精一杯。黒部本流に出れば休憩。こんなにも明るい河原に私達だけしかいないというのが、不思議な気がしてならない。祖母沢を過ぎ、祖父沢に入り、二時間も行くと水量も少くなる。岩魚釣りもここら辺迄だと鬼窪さんと別れる。僅か二日間の生活だったが私達は別れ難いものを強く感じた。急に疲れが出たのか足が重く雲の平の小屋迄意外に長い。約束の時間、一時には一時間早い十二時に着いたが、私達はもう疲れ切っていた。カミさんは頭が痛いと言った。二階に寝てしまふ。坊やも明日は下ろうという。まあ惨々たる有様であった。そへ石井さんが健却を飛ばし、長駈、槍から着く。そうこうしているうちに太郎からの一隊が元氣よく到着。本来なら感激して、無事集中に成巧した喜びに湧くところだったろうが、私達はとてものな気分になれずしよんぼりしていたので他の連中も芽えない。然しカミさんも皆の顔を見るとたしよ

うよくなり高天ヶ原に一緒に行くので「安心、眠やかに行進を開始したのであった。」

(2)

七月のある日、梅雨の明けのを待って北アルプスの表玄関上高地から入り槍ヶ岳・三俣蓮華岳・雲の平・高天ヶ原・水晶岳・野口五郎岳・鳥帽子岳を経て七倉・大町へのコースを三泊四日で行く事にした。テレビの天気予報で「梅雨明け」と聞いたので安心して新宿発一八時五五分の急行「かいじ」に乗った。仕事の都合で待ち時間がないので座席指定券を買って置いたのでゆっくり座り八王子を過ぎる頃からぐっすり寝てしまった。松本駅には二三時三六分に着いた。駅前に出ると直ぐタクシーの運転手が上高地迄「六〇〇円」と言うのでそのタクシーに決めた車の中で寝ていると客を二人つれて来てもう客はいないので車を出すと言う。一時三〇分松本駅前を出発上高地に向う。上高地迄二時間位と言っている

雨の中を今日泊る予定の檜が岳山荘目指して六時に出発した。静かなほんとうに静かな上高地。そしてだれもない河童橋に一人で立った。徳高も焼岳も見えないがスの中に隠て見当もつかない。何か

平雲
葛市
三俣
大井
橋
上高地
神
山柱
日
ら歩
穂高
散
侯
の
中
に
は
大
に
あ
は
見
た
こ
と
は
あ

足に自信はあるが槍沢の登りは苦し

27

うと皆んな変な顔をしている。「僕もはつきりわからないが本には花と書いてあるし」と言い直す。全くいやになる。そんなら聞かなければ良いのと思う。まだくゆるい登りなのだが薄日がさしてきたので汗が出てくる。これから標高差一〇〇m以上の登りが思いやられる。槍沢小屋の側の川原で休もうとしたら側で幕曾していた人が「丁度お茶を入れたので」と誘ってくれた。さっそくごちそうになる。のども渴いているし女性が入れてくれたのでとくにうまい。まして男二人に廿四人さぞかし楽しい事だろう。それに引換お茶一杯で大喜びのかわいそうな自分の姿そんな事を言うと「一人は気が合っても男勢でしょう」と言う「気なんか合わなくても男勢の方がやっぱり良い。明日になれば雲の平で皆んなに逢える。そんな事を考えたら急に先



を急ぎたくなつた。赤沢山の裾をからむと雪渓があり道はきつくなる。一人なので気が合いますぎて、どこでも休みたくなる。晴れていたらこのあたりから槍の先が見えると思う。ただ今日はガスにかくれて見えない。二・三年前から興味を持ち出した高山植物がほとんど休みを尋くしてくれる。ハクサンイチゲ・チングルマ・シナキンバイと写真を写している。時の過ぎるのを忘れる。振り返ると槍沢小屋あたりで見上げた赤沢山が目の下にある。だいたい登ったと自分で感じている。殺生小屋が見え暑い苦しい。登りも半分ぐらい過ぎた頃若い五人のグループが休んでいるのに追付いた。一人でしかもきつい登りに飽きていたのでさっそく話しかける。南くと昨日は槍沢小屋の所に幕営したらしい。歩きながらいろいろ話していると偶然にも僕の田舎の近所の人で弟の友達だった。

それなら話は別も同じ仲間のようになつて殺生小屋の水揚げボンプの所にいる人を遠くから冷かしたり、登つてくる人を上から拍子をとったりする。そんなぐあいだから足はなかなか前に進まない。それで赤松沢小屋から山頂まで午後二時二の分殺生小屋に着いた。

赤松沢の幕営地在小屋の人に聞いて、皆んなが持つて来たライメソをぶちそうになつて、いゝとガスが赤れて槍の頂上が見える。今にや、頂の上は落ちてきそうだ。あと一頑張り、と別れて槍が岳山柱目ざす。手がとどくやうでなく、近くならない。ここまでくればどう間違えても今日中には着けると自分を慰める。今度はこちらが小屋の前で並んだ人に拍子をとられる。面白くないから下を向いて黙々と歩く。なかに苦しい登りも終りやうと今日のぬぐら槍が岳山柱に三時三の分に着いた。さうして明日の食時や争当の事を聞く。朝食は尚に給わぬのを争当に付する事にした。ぬぐらが決つたら力メラを持つて槍の頂上に

立つ明日のコース又双六や三侯薙華を見ようとしたがガスで全然見えない。降りて夕食を済す。これで今日の予定は全部無事に済んだ。明日も長い行程だ。でも雲の平で久保田さん石山さん岡バーティーに逢える。皆んな無事で逢えるだろうがそんな事を考えているうち疲れているのか眠くなつてきた。

カメラと地図を持ってさっきから頂上にいるがなかく、日が登らない。体が冷えてくる。頂上が人でいっぱいになった頃やうと目だ。何回もシャッターを切る。それが終れば今度は地図を拡げて、まず今日のコースを探す。双六岳と三侯薙華岳が稜線を朝日に赤く染めて遙か彼方の気が遠くなるような前にある。又、右に鷲羽岳、その向うが雲の平だろう。三時三の分まで行かなければならぬ。目を左に移すと笠が岳が美しい。一度行つてみたい山だ。穂高や常念や表銀座コースは見え見えない。今日は先が長い時間を追われるので小屋に於ける。五時一の分槍が岳山柱を

とに西鎌尾根を下る。滑りやすい、いやな道をいつきかけ降りる。笠が岳から明るくなつて、雪沢が赤く光る。何回もシャッターを切つた。下手な鉄砲の口で数をこなせばなんとか写真になるような気がする。今日は仲間が出来そうもない。前も後も誰もいない。そんな気持を慰めてくれるのは、イソウメ、アオノツガザクラ、ワルマエリ、クロユリ等のきれいな花だ。それを見るたびにカメラを向ける。今日は雲の平へ着く迄休みない写真を写している時が休みと思つてあきらめよう。振り返れば槍が頭の上に高く聳えている。もうこんなにかと前を見れば三侯連華が遙か彼方にある。大きい雪沢があったので雪沢を入れてまた槍を写す。樺沢岳に着いた。前を見ればもったいない程下りた所に双六小屋がある。下りは良いが目の前の双六への登りを見ると、もったいなくてしかたがない。双六小屋へ久保田さん達が昨日泊つたがと思つて聞いたが知らないと言う。双六

岳へ登ろうと巻道を通らず小屋で水を取っているパイプの側に登り広いお花畑に出た。天気が良いので今日はじめての大休止。冷たい水で汗を流し双六から三侯連華への稜線へ雪沢を登る。しばらく双六岳と三侯連華岳を見比べていたが時間がなかったので双六岳を諦めて三侯連華岳に向う。三侯連華岳は素晴らしい展望台だ。穂高から槍が岳それに表銀コースの稜線が美しい。目の前に鷲羽岳の岩肌が光っている。その左に水晶岳らしい頂が見える。遠くに室堂と薬師岳との間に皆んなの待つている雲の平あと三時向で皆んなに逢える。先を急ごう。遙か下の黒部源流の雪沢を渡っている人に追付くつもりで直ぐに道のない所をかけ下る。雲の平の登り口にきてみれば三侯連花で見た人達はまだ半分も登っていない。こちらにはサブザツクなので直ぐ追



越した。やっと雲の平に入った。雷鳥がハイマツの向を歩いてゐる。雲が出てきた。雷鳥を見ると雨が降るといつていたが、そんな事もないだろう。雲の平山荘が見えてきたもう直ぐ皆んなに逢える。走り出したい気持だ。近づいても小屋の前には誰もいない。石山さん達はまだでも久保田さん達はラーメンを作っている。とにかくだん／＼足が早くなる。小屋に着いてみれば久保田さん達はラーメンを作っていた。二時前に石山さん達も着いた。無事で大きな集中ができた。また何時かこんな山行をやりたいと思う。皆んな揃って元気のでたところで高天ヶ原に向う。

(3)

雲の平、高天ヶ原、水晶岳、候にとつては魅力のある山の一つであつた。支那に入つて向もない昨年の四月にこのコースに行くつもりで仲商に入れてもらふことに成り、七月十九日夜、男子二名、女子三名のパーティーで上

野を後に富山を経て立山線小見へ向う。早朝のバスは明日より運行とのこと、それではとタワシーを奢つて折立平まで入る。登山者名簿に記入して出発。一歩樹林の中に路みこんだ所に、数年前遭難した愛知大山岳部員十三名の慰霊塔がある。登山道に入ると、いきなりクマザサの中の急なジグザグ道が初まる。うつそうと茂った樹木が視界をさえぎり、足元にはかり気をとられてゐるせいにか、白いゲンタチバサの花やミスバショウの大きな葉がやたらと目につく。こんな道を約一時間四〇分、一八七〇川の三角点に出てホツとする。ここから初めて禁師岳が見えるはずだが見えない。なぜだろう？……そうがスガがかつていて見えないのさ。……このあたりよりようやく樹林が薄くなり、明るい草原にぬける。池塘がちらばり、ニツコウキスゲ等が咲き乱れて美しい所である。こうして花と草と池塘の道を繰り返して行く。天候は回復のきざしを見せはじめ、右手下には有峰湖が湖面

を輝やかせてわれ／＼見送ってくれる。左手には薬師岳が嶺とした姿を見せて来た。ほどなく純白のコバイケソウが一画面咲きほこる大草原になる。その中に今日の行程の終り太

郎小屋が小さく見える。小屋の前に立てば待望の雲の平、荒々しい山肌を見せる水晶岳又黒部五郎岳、目の前には薬師岳のしかかるようにどっしりとかまえている。「そうだ、明日あの雲の平にて数日前より笠が岳方面に入っているKさんら三名のパーティ又槍が岳より来るIさんと三パーティが合うことになっているのだ」。

二日目

青空が広がっている。今日は暑くなりそうだ。五時四十五分太郎小屋を後に「雲の平」の指導標に導かれてジグザグの急な尾根道を下ると薬師沢に出る。しばらく右に左に渡りながら沢沿に歩くと薬師沢新道の登りとなつて来た。小さな尾根を



乗り越えてフマザサの密生する下りとなるとやがてカベツツが原、前面に雲ノ平の斜面が立ちはだかる様になると薬師沢と黒部川源流の出会いに着いた。広い河原でしばし休憩。五・六年前迄は腰までつかつて渡渉した黒部川には今曲では吊橋がかかっている。一人づつおっかなびつくり吊橋を渡ると、いよく雲の平への急登が始まる。快調に登るもさすがに苦しく息が荒くなつてくる。しかし／＼高度加かせるのは有がたい。振り返ると木の向越しに大きな薬師岳が私達を応援してくれる。道すじにはイワカがミが咲いている。こんな道をあえ／＼約二時間歩登る。何となく林が切れたと慰うと我然、原が南けて雲の平の入口、アラスカ庭園と呼ばれる所に着いた。「もう雲の平の一角に着いたのだからのんびりして昼食にしよう」。「全員、意義なし」。アラス

力庭園の草原を抜けると今度は池塘と岩の「奥日本庭園」と呼ばれる所。岩の向を流れる冷たい水がおいしい。ハクサンシャクナゲや名前がわからないが小さな花があちらこちらに見られる。小さな丘を越えると雲の平山荘のある「ヤリシヤ庭園」が

来てゐるだらうか？ 私達
は予定通りの

カベツナノ原は、『河童が住める』、また『河童が原』が訛つてカベツナノ原となつたのです。更になると私達カベは金儲けをします



時間に着けそうだ。「着いたぞ」「単独で来た。Iさんはもう来ている。」「Kさんのパーティもいる。」今日は、無事に来ましたよ。嬉しい一時であつた。総勢九名、賑やかに今日の宿地、高天ヶ原に歩を向ける。ハイマツのトフホルや残雪も見られる楽しい道だ。「高天ヶ原」期待していたほどのことはないが、

まゝみこがまゝニアシアスの山中で温泉に

入いれるというのはうれしい。

三
日
目

快晴 今日は岩苔乗越しから裏銀縦走路を野口五郎小屋までの行程。六時半出発、目の前に繫師岳が朝日を浴て輝いている。岩苔乗越への斜面は一面のお花畑、いさんより花の名前を教えてもらうがなか／＼おぼえられない。左手の急斜面は水晶岳へ続いている。縦走路に出ると槍が岳が視野にとびこんで来

た。燕岳・大天井岳その向うに常念岳も
姿を見せる。二二から天候がややしく
なつて来た。水晶小屋（宿泊不能）に荷
をおき水晶岳に急ぐ。手前のピーク南峰へは
わずかに踏まれた岩稜づたいに登る。浮石も
ありちよつとスリリングな所もある。二、九七
七七mの三角点は低い方の峰北におかれてい
るので実際にはもうすこし高いはずだ。頂上附
近はガスのため視界はない。水晶小屋に戻る
頃、雷雨となり足止めをされたが一時雨半ば
どであがつた。二二から東沢乗越まで岩のが

ラガアしたやせ尾根をゆつくり下る。野口五郎岳の広い頂上には花崗岩の風化した白い礫層におおわれたアロムナード地帯で展望もすばらしい。雲海の上に槍・穂高連峰が浮かぶ。北には白馬三山、鹿島槍・茅渚岳の麓の麓の方に日加沈む。

四日目

今日はいよいよ最終日。予定通りの日程で帰れそうだ。まずは御来光を見に再び野口五郎岳へ、小屋に別れを

つげ三ツ岳は幅広い稜線の散歩道。見下す高瀬川が五ヶ所所の調整が美しい。正面に立山・剣八ツ峰が威厳を持って迎へ、右には表銀座の大パノラマ、左には赤牛岳・水晶岳の峰が肩をならべる。三ツ岳附近にて高山植物の女王と呼ばれる薄いピンク色の華麗なる花「コマクサ」を見つけ歓声をあげる。烏帽子岳



コマクサ

へは王さんと二人だけで行くことにして、他の人は先に行く。まずニセ烏帽子の肩をまき、トナリウ帽子の頂上へ岩場をよじ登る。頂上は一人きりようやく座れる程度で、登った証拠にと写真をとり、下りにかかる。北アルプス屈指の急坂ブナ立尾根を先の人に追いつこうと二時間のところ、一時間でかけ下る。(危険な下り方をしたとあとで反省) 湯小屋からは軌道歩き、途中山の神附近でちょっとした峡谷や小ナイヤガラを思わせる堰堤が長い道にアワセントをつけてくれた。こうして四日間の山旅を七倉にて一浴して終った。



山 行 報 告

第145回～第150回

第145回

1月21日

高松山

参加者

渡辺関代 佐々木美智

子 久保田治 鈴木国

之 吉岡信子 福原ミ

ツイ 足立ス子 他1

コースタイム

横沢(8.05)山北(9

50)10.00)尺里(10.30

一才6天(11.50)12.15

一高松山(13.10)15.10

一ヒリ堂(15.20)尺里

橋(16.40)尺里バス停

(16.50)16.55)新松田

(17.10)



第146回

2月3日～5日

菅平スキー

参加者

神谷和雄 小川竜利 石井春男 竹田明

渡辺関代 他3名

コースタイム

上野(14.10)上田(17.19)17.40)菅平(18

30)菅平(13.10)上田(14.20)14.55)

上野(18.52)

第147回

3月17日

矢倉山

参加者

石山武 久保田治 鈴木国之 石井春男

佐次幸郎 竹田明 関野昌 吉岡信子

内田栄子 他5名

コースタイム

横沢(8.05)小田原(9.15)9.19)大雄山

(9 43 S 9 45) 天倉沢 (10 00 S 10 20) 天倉岳
 (11 55 S 14 50) 足柄峠 (17 05 S 17 22) 国府津
 (18 08 S 18 32) 横矢 (19 32)

才148回 才11回本誌集中

4月7日

浅間山

参加者

吉岡信子 佐々木美智子 影山元芳 久保
 田治 浅井俊明 関野昌 鈴木国之 竹田
 明 石井春男 佐次幸郎 菊地政見 内田
 栄子 渡辺関代 蒲谷弘子 福原ミツイ
 中山一重 斉藤隆子 山崎由利子 他4名

コースタイム

横沢 (8 24) 小田原 (9 39) 大平台
 (10 25 S 10 35) 浅間山 (11 55 S 14 50) 湯本
 (16 30 S 16 49) 小田原 (17 05 S 17 33) 横沢
 (18 46)



才148回

1月18日

才148回

五月二日 S 5日

奥秩父 金峰山 甲武信岳

参加者

碓氷人 久保田治 竹田明 佐次幸郎

内田栄子

コースタイム

蓮崎 (0 05) 瑞璫山荘 (1 10 S 1 45) 大日
 小屋 (3 30 S 4 00) 金峰山頂 (9 00 S 9 50)
 大弛小屋 (13 40) 泊
 大弛小屋 (17 20) 国師岳 (8 35 S 8 40) 富
 士見台 (12 00 S 12 15) 甲武信岳 (14 25 S 14
 30) 甲武信小屋 (14 45) 泊
 甲武信小屋 (5 00) 白岩 (7 00 S 7 20) 十
 文字峠 (8 30 S 9 10) 戦場ヶ原 (10 30 S 10
 40) 信濃川上 (12 05 S 12 14)

山



はやちねうすゆきや

光50回

5月19日

西沢渓谷

参加者

久保田治 吉岡信子 今川勝子

渡辺關代 川村ふじ子 他一名

コースタイム

新宿(030) 塩山(335 415) ナレイ沢
バス停(510 5520) 二股(535) 不動小
屋(700 5915) ナレイ沢バス停(1025)



イワカガミ

芝部に入会して

足立久子

初めて登った山と言えば、おそらく中学一年の遠足で行った大山であったと思う。

どの位から山というのか知らないが、歩くのは好きな方だから軽いハイキング程度のは長く出掛けたものだ。

けれどここ二・三年は殆んど行っていない。もとく足にも自信があるわけではないからどこまでついていけるかわからない。



皆さん豪傑揃だって

クラブというから
ていたらなかく
ちよっと恐れをな

ハイキング
軽いかと思っ
皆豪傑ぞろい、
した次オ。

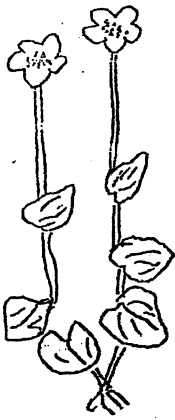
三年程前だったか、夏、夜行日帰りで軽井

沢の神津牧場に行った時のこと。―― 牧場のことはあまり長く憶えていない。なにしろ濃霧の為牛は一頭も見ることが出来なかったものだから――

前日まで降り続いていた雨の為足元は膝から下がどろんどろん、重い足を持ち上げてやっと峠に出た。名は平作峠だったと思う。ここから見下す一面のお花畑、うつすらと霧に包まれゆれている。淡く、優しくコスモスに似てその情景はなんとも言えず溶けて吸い込まれてしまいそう。まさに「夢の国」であった思出がある。

それ以来、陰しい山にも万憐に咲く高山植物に取付かれてしまったよう。

人ごみが大の苦手の私、ローカルなところを求めて大いに歩きたいと思っている。



ウバテンソウ

新ハイ4ヶ月

斉藤隆子

一月 浜石岳

今日は初参加。幸先よく上天気。由比で歩き始める頃は堅苦しさもだんくんと解れて気持ち楽になる。一汗かいて頂上での昼食は、なごやかな雰囲気、春のよううららかな海、遠い白い山々、富士山と、すっかり解放されてよく食べ、よく笑い、本当にきてみてよかったと、今朝までの心配がおかしいほど。皆さん本当にありがとう。

二月 四尾連湖

バラ色、朱色と美しく変わる山々に寒さも忘れ、しばし見とれてました。

四尾連湖とはなんと小さく可愛いらしい湖なんでしょう。蛾ヶ岳からは七面山が立派で

した。「三角点」では大笑いでした。帰りの寒さと埃では泣きたいような気持ちでした。横浜支部の方に初めてお会いしました。久保田さん御夫妻です。来月の例会には出度させていただこうと思います。

三月 入笠山

雪の山は初めてです。展望が素晴らしいとか大いに期待していましたが、残念。雪が多くて駄目でした。頂上は雪煙が無上。ていて断念。スキーを履いてすべる真似。帰りはやっとハツ岳が全貌をみせてくれ、裾野がとっても雄大。汽車の中では、抱腹絶倒の連続でした。

四月 浅間山

新ハイのお祭りなんですね。大勢の男若者が一同に集い自己紹介、コーラスなど楽しい一時でした。群衆の中の孤独みたいなものを感じたのはまだ日が浅いせいなのでしょう。

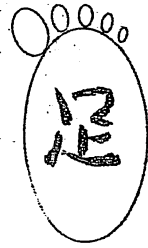
か。おいしい豚汁ありがとう。係の方にはいつも大変お世話になります。桜・椿・海棠とみな今が盛りと咲き誇っています。横浜支部入会後の初めての山行でした。

愛鷹山

いつかみた山のシルエツトが印象的でした。私には「無理かな」と思ってたけれど、連れて行っていただくことにしました。

汽車に乗り遅れるなんて不心得をしてしまった。本当にごめんなさい。親切な御配慮がなければ、この愉快な山行は実現できなかったでしょうに。初めから御迷惑をおかけしてしまいました。十里木で一泊。翌朝はすばらしいお天気、晴れわたった朝の空に富士山が清々しい。遅くれないようついて行くのが精一杯。鋸岳はスリルがあって面白く、最後の愛鷹山の登りは心臓が飛び出しそうな登りで苦しかった。長いく下りにはうんざり。トラックに乗せてもらった時は全くほっとしまし

た。こんなに満足感を味わった山は初めてです。じままでとはちがい、経歴豊かな方々と御一緒させていただけるので、楽しさも幾倍に



かもありました。これからもう少しお願ひいたします。

土口 岡 信子

42/11/3 石打大和スキー

スロープの変化をしく一度滑ってあきたとか。

2/11/12 赤倉スキー

バターのパンがすごくおいしかった。二百円のカレーよりおいしくて経済的です。

3/15 苗場スキー

雪質最悪、今までのイメージ台無し。

3/26 明神明星岳

空にはぼっかり浮んだ富士山が印象的。

4/2 日の出山

「歩いて二時間、乗って？分」恨しい標識だ。

5/4 神津牧場兼船山

雨の為牧場から初谷鉱泉へ沈没。トラップ「要注」を教わりグループ対抗戦、二連勝で気分爽快。

5/4 猫越峠

ピンクのコメツツジが可愛かった。

6/4 浅間山

山賊の歌を初めて聞いた。新緑のすがすがしさ。

6/18 丹沢表尾根

夏山トレッキング

7/2 霧ヶ峰

まさしく名の通り霧にけむる霧ヶ峰。雨の白樺湖もなつかしい。

7/20 北アルプス雲の平

誘って下さった久保田さんに感謝の気持ちいっぱい。「タカネヤハズハハコ」名は言えるがさでどんな花だったか、冷たいあの水が又飲みたい。

8/6 ミツ峠

「しだは号」御参照

8/13 丹沢中川キャンプ

おたまじやくし体操を覚えた。

8/20 丹沢源次郎沢

ワラジを持っていかなかったのが今でも残念

9/3 丹沢寄天キャンプ

竜洞の沢ザイルで遡んだのが面白かった。

9/17 丹沢主脈縦走

馬鹿尾根を登ってみたいといつかねてからの念願が実現。

10/15 宝達太良山

初めて見た紅葉のすばらしさが忘れられない。

10/22 丹沢湯舟山

初めてビブラム履いて重いような軽いような……

11/3 経ヶ岳仏果山

一人山行の快感。

11/6 大山

うんざりする階段。

12/6 乙女峠金時山

山小屋と違って、ふわ／＼の花に夢を希ふ。

12/17 松洞丸

丹沢で一番好きなのは松洞丸と言った人の気持ちが身にしみる。

雑談

佐次幸一郎

小生山に登る事三年。中味は以外と薄く、山を知るにあらず語るにあらず、しかしである、初登頂の話しでもすることにする。

今から六年以前の七月の事、若いたくましい青年と四人のヤンチャ坊主を想像して下さい。青年は、山にかけてはオーソリティーの中学の先生である。坊主達は、その配下の生徒達——この中に筆者がいるわけになる——

終電車に近い相鉄の中彼らはこれからの行動にとてつもない興味と興奮をもち、じっとしておれずたえずさわがしい。渋沢に着く。もうバスはない歩く事になった。大倉まで、の平凡な街道でさえも彼らにとって目新らしい楽しい山へのアプローチとなる。大倉口で水をつめる。この辺までくると眠気がさしてくる。顔を洗う。この先水がないというので水を腹イッパイ飲む。コースを知る者にとつ

てこの先は驚怖であるが何せまだ中学一年の少年達である。コースを知るよしがない。堀山をすぎる。眼下にはチラ／＼町の光が目に入る。登ってはふり返り立ち止る。町をながめる。楽しんで登っているようだ。目前にある驚怖の登りが見えないのがもつてのさいわい。以前の元氣も消えうせばてぞみである。だまって歩く。先頭、二番、三番、最後尾とペースがいちじるしくおちてきた少年がある。まだ星空がさえる。降るように目にせまってくる。明日もまた上天気だろう。ついにダウソンの場坐りこんでしまったものがある。最後尾の少年である。ぐったりして意識がない。何を言ってもわからない。たくましい青年は彼を背負って皆より先に行く。頂上までワンピツチ。この部分はなぜか記憶がないので何とも書きようがない。この少年がだれであるか又彼がこの先どうなっているのか、それは想像にまかすことにして無駄話して終る事にしよう。

これは
いいだ!!

竹田 明

生まれた月と年がずばり

タずつくぎる。前のニケタが生まれた月で後のニケタが年今である。解答者はいつの場合にも所をお忘れなく。



では早速その要領を、先ず相手に紙と鉛筆を渡し解答者は相手に「生まれた月を2倍して下さい」と言う。そこで相手は、例えば12月生まれの人だとすれば12×2=24、次に「それに5を加えて下さい」と言う。相手は24+5=29、次に「それに50を掛けて下さい」と言う。相手は29×50=1450、次に「それに自分の年今を加えて下さい」と言う。相手は20才の人なら1450+20=1470、次に「それに一年はあつたから365を引いて下さい」と言う。相手は1470-365=1105、ここで相手に答えてもらう。相手は1105と言う。ここで解答者はすばやく115を加える。1105+115=1220、それを下からニケ

シヤマタコノ、ウ



山と人生

竹田明

山は

若人のファイト

人生と同じ道だ

けわしく 苦しい登りがある

らかな下り

平らな尾根もある

油断をしたら

谷底に吸い込まれてしまうぞ

油断をするな

一歩 一歩

いどがず

足を大地にふみしめて進む

頂上

さへは

美しいお花畑

蝶が舞い

小鳥が歌をうたっている

小鳥が歌をうたっている

さへは

それとも恐しい悪魔が

待っているかもしれない

登ってみなければわからない

そう

人生も同じだ

頂上をめざして

がんばろう

若人だ

ファイトだ

のんびり スワツチ行

渡辺 関 代(画)

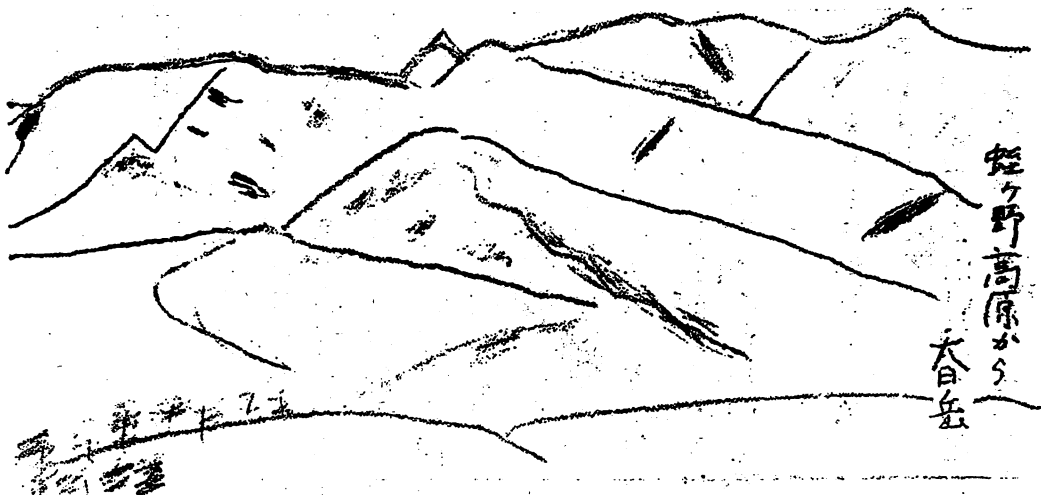
越美南線の郡上八幡駅で山吹きを持った老人が隣に座
「た。車窓の景色を眺めていると話しかけてきました。

「どこまで行くのかね」

「今日は蛭ヶ野高原で泊る予定です」

「まだハイキングには早いんじゃないかな。でも白鳥
まで行くと白山が左の方に見えてくるよ」

白鳥では乗合バスが混んでいたので団体客と一語に乗
せてもらいました。蛭ヶ野高原には十一時半に到着。「
水芭蕉群生地、アヤマ沢」と云う車掌の声でバスを降り
ました。確かにパソフレットには水芭蕉が群生していま
すが、ほんの少しでも尾瀬に行った私には期待はずれで
した。食堂の人に目せたら「何年前の写真かしら」と首

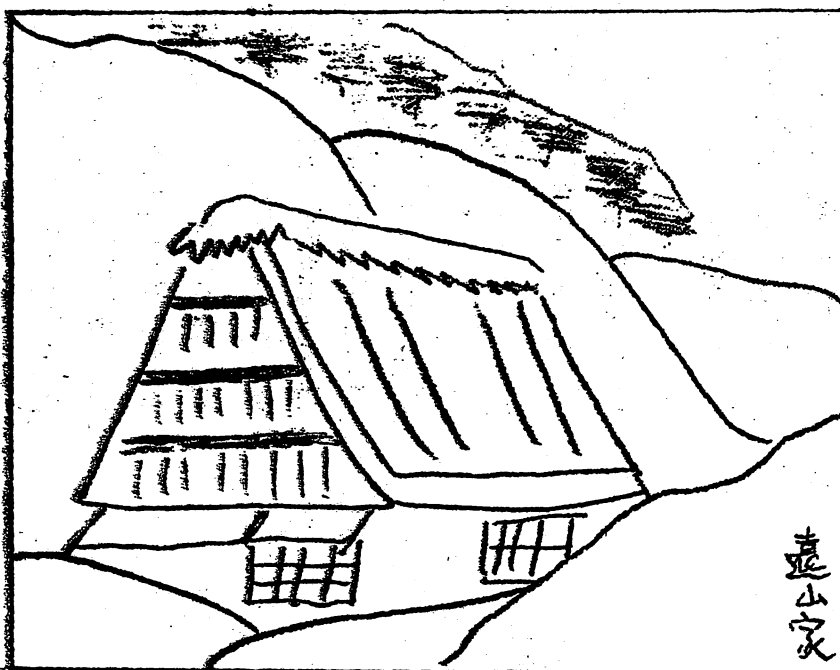


をか上げていました。

高原を散策して今夜の宿、怪ヶ野荘へ行く

途中では、マイカー族の一家が田圃の脇の湿地帯で水芭蕉を根ごと引き抜いて、ビニールの袋に入れて持っていてしまった。そう云えば、バスの中でも男の子が「お父さんのおみゆげに持って帰る」と云っていたけど、数少ない水芭蕉がなおさら少なくなってしまうのに。

今夜の泊りは私一人らしく山荘はとてお静かでした。夕食後曇雨のスワツチを巻いていると急に雨音が聞こえてきました。



遠山家

今日の始発バスは九時四十三分なので、八時頃まで蒲団にもぐっていました。雨がまだ降り続いていましたが、山に登るわけではないので出発する事にします。バスは牧戸ー御母衣ダムー合掌部落で知られる平瀬と走る。私は御母衣で降り、バス停のそばの郵便局で道をたずねる事にしました。

「合掌造りで有名な遠山家はどのへんですか」

「ここからダムの方に向って少し行った右側にありますよ、とここで中を見たいんですか」

「あら中も見せてくれるんですしうか」

「遠山さんは引越したんであの家は材で買いとったんですよ、と中を改造して見学出

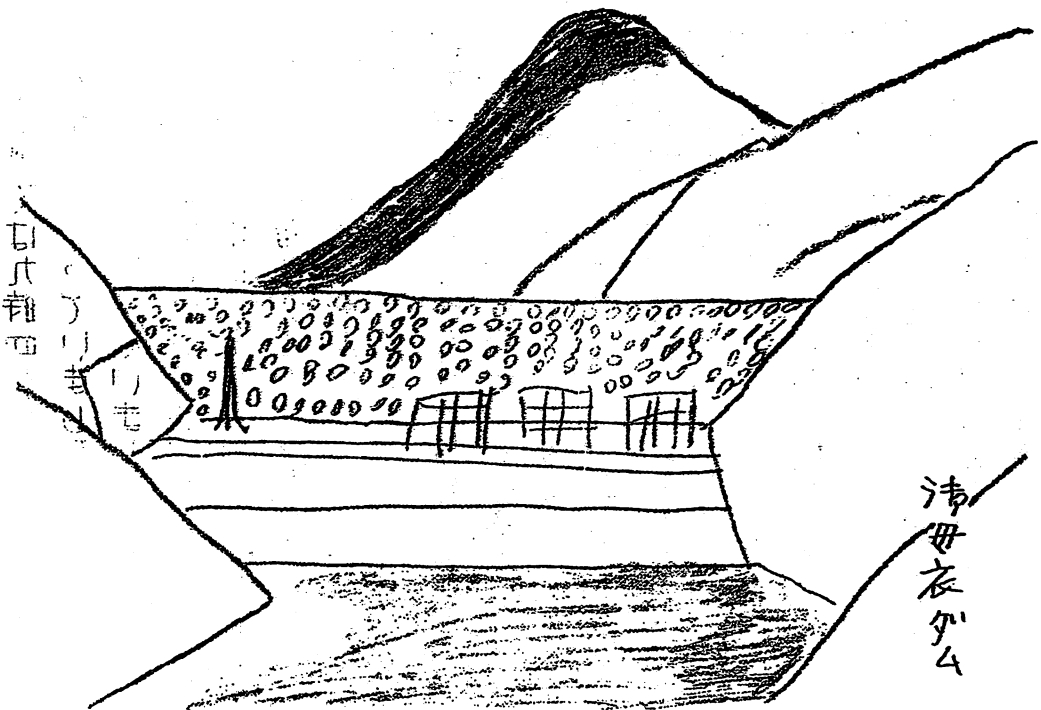
ですよ、もう少ししたら中を改造して見学出

来るようにしますよ。でも今は升側だけしか見
れませんかどなし

中も見せたいですが、なんて思わせぶりな事
を云って、戻っかかりさせるなんて素朴な田舎の
人にしては人勝悪い。ぶつく云ってもしよう
がないので郵便局を出ました。十分程で遠山家
です。局員のおっしやるとおり外から眺めて写
真をとり、再びダムの方に向う。林道は時々車
が通るだけなので道のまん中左のんびり歩いて
行った。四十分位でダムサイトに出た。その
両側は降ったり、やんだり、そのたびに私は今
をさしたり、つぼめたり、ダムに向って直泳な
コンクリート造りの御手洗いやあり、その上
ダム展望台で、御手洗の隣りに半坪程のチャチ
な売店があつた。

バス到着まで一時間もあつたのでスワツチを
始めた。雨がはげしく降り始め、スワツチは
中止。定刻を少しまわってバスがきました。

今日の予定はあと牧戸で高山行のバスに乗り
換るだけです。



三ツ峠

蒲谷

弘子

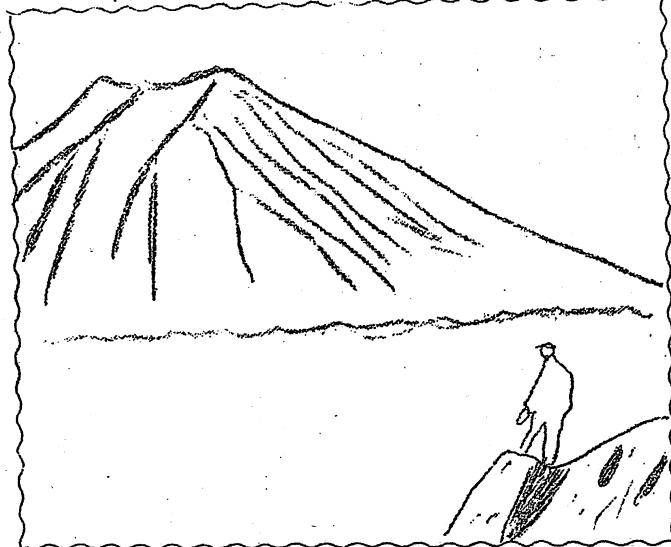
悪友二人とは始めての山歩き、皆から雨せと言われ、お天気が心配されたが、朝には雨もやみほつとした。

横浜駅十一時の待ち合せで、八王子を最終電車に乗り三ツ峠駅下車。シーズンとはいえ休日をさけて出かけたので、すいていると思つたにもかかわらず、登る人で「いつはいいその中にまざつて我々廿三人まだ夜が明けきらぬうち懐中電灯を片手に柄杓沢に沿つて登る。進むにしたがつて、だんく」と列がとぎれ、前後の間隔が広がり、少し「こわかった」。歩き出して始めての葎磨石の小屋にはランプが「ポヤート」つき、なんとなく鬱むとした感じがする。ここに着いたのは四時頃、あたりも明るくなり、歩きやすくなつてきた。いよく二二からが、登りに入る。ゴ

ロゴロした道を登ると、尾根に出る。まわりには、いろいろな花が咲き、左手を見ると、雪をいだいた富士山がとても素晴しかった。

富士山を見ながら二時間ほど登ると八十八大師。石の地蔵が八十八も並んでいる前で一休み、風が冷たく体が「ヒンヤリ」としてくる。これより岩壁の下をまわつて登り、さらに急坂を登りきると頂上、四季菜園に出る。

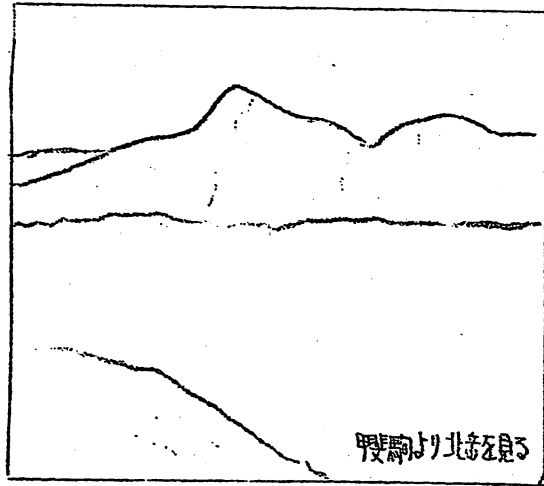
ここで朝食をとり一寝りして木無山、母の白竜へと、じぐざぐに下り河口湖に出る。



北岳の想い出

鈴木園之

北岳との最初の出合は大菩薩峠である。富士の右側に延々と連なる山波の中にこの山脈があった。中央線に乗った時は塩山・勝沼を過ぎる頃から、ブドウ畑の遙か上に見える。たいてい雲の上に並んでいるから、とてつもない高度を感じる。ブドウ畑の芽吹く新緑の頃はいつそう楽しい。しかしその美しい山容に接するには、まだく遠い。夜叉神峠・カラマツ越しの姿は高く美しい。岳に雪の来る新雪の頃から残雪が消えるまでが良いだらう。鳳凰三山・花崗岩とダケカンバ、ハイマツの尾根からは野呂川をへだてているだけ



北岳の眺望

で、頂上直下のバツトレス（胸壁）も手に取る様な直さだ。甲斐駒、仙丈、塩見、いずれの山頂からも北岳は独特な風貌で人々を引きつける。しかしながら私にとつて、早川尾根にある小さなピーク・栗沢山での出合が、一番感動的だった。頂上直下の岩場を乗り越えると飄然と現われ、あまりにお尖鋭的に見えたので別の山の感ひさえした。5月の爽やかな風の吹くそのピークで、いつまでもながめた。そんな幾度かの出合の

北岳を、実際に登ったのは、もう何年か前になつてしまった。

その年はうつとろしい梅雨が降り続いた年だった。広河原から草すべりを登つて、北岳・向ノ岳・豊鳥岳へと歩き大門沢に下

った。草すべりの急な登りは雨だったなあ。あの時はシナノキンバイの咲くお花畑の斜面では、とてもサツクを下ろして憩むことを許してはくれない程、激しい雨に打

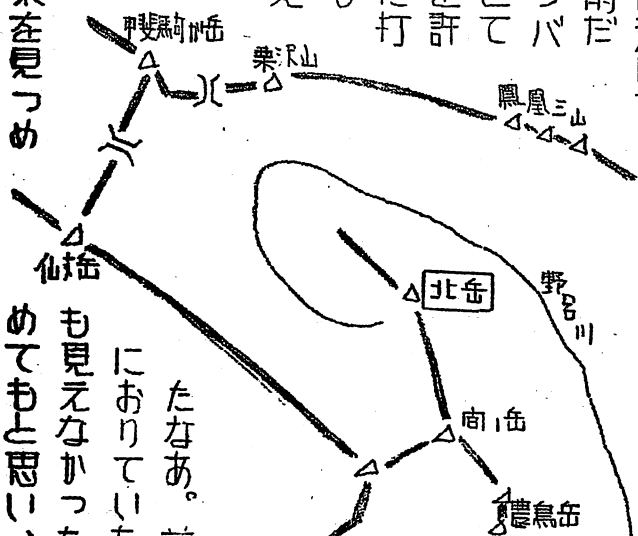
たれたつけ、でも翌日はとても信じられない程の上天気で向えてくれた。肩の小屋に泊った

人、全員が、陽の上るのが待ちきれずに外に出て、『富士

山だ』『ハツ岳よ』と冷たい

風の吹く山稜で、夜明けの光景を見つめていた。

3192mの頂上では『今日は豊鳥の稜線



小屋までなんだから、『ソビリ行こうや』と仲々腰を上げず、同行のAを困らせたものだ。

中白峰の登りは、お花畑とてもきれいだ。たなあ。小さな岩と岩の間には、タカネツメ草やイワオウギ、ミヤマダイコン草の白や

黄色の花々が真夏の日差しを浴びていた。

向ノ岳の頂上からの北岳もよかったよ。雪田に埋めた

菓物の缶詰を、食べ終えてから昼寝もした。目をあけ

ると、いつもピラミダルな『あの山』が見えた。

豊鳥岳からは残念だったなあ。前の日はあんなに雪が、向ノ岳

にありていたのに、豊鳥の頂は深い霧で何も見えなかった。3日向の山旅の終りに、せ

めてもと思ひ、北岳から歩いて来た方向を、霧の晴れるのを待った。しかし、霧は濃度を

増すばかりだった。大門沢の急な下りでは、

到々雨が降ってきた。

北岳での一日だけが好天で、翌日から又雨。数日も降り続いた事を思うと、まったく

ついていたと思う。そしてその一日が、南アルプス山行中でもスゴットライトをあてた様に、印象的にいつまでも残っている。

一つの山行

(奥秩父縦走) 久保田 弘治

内田栄子さん、通称エーコちゃん、社会人とはいえ未だ少々の面影が強く内田さんというよりエーコちゃんと呼ぶ方がふさわしい。その彼女が支部山行奥秩父縦走に只一人の女性として参加した。

山歴、日帰りのハイキングが少々、夜行日帰り山行が三月の入笠山只一回、その彼女が危険はないとはいえ普通のハイキングとは異なる奥秩父主脈縦走に始めてキスリングを背負って参加した。それも殆んど男性とハンデ

イのない位の重荷で。

多少不安のあつた金峰山の登りは彼女殆んど快調に登る。樹林帯を過ぎ五丈岩が真近になると周囲の展望は素晴らしく開けた。八ヶ岳、南アルプス、富士山は目前に、遠く中央、北の西アルプス、御岳、乗鞍、茅山山といわゆる中部山岳の名山がびっしりとうめつした雲海の上にそびえ立ち、まいせつにいまがない。おそらくはこんな山岳展望に始めて接したのであろう彼女にとって、その特徴の

ある目玉を一そう大きく睨いて大感激のていだ。もつとも初心者ならずともこんな景観にはめつたにお目にかかれぬのだから彼女の感激はさぞやであつたと思われる。

金峰山 山頂目前でトツプを彼女に交代する。始めての高山であれば山頂に立つ嬉しさも格別であろうからささやかな贈物として、トツプにたつや足取も軽く岩を駆け上り、山頂に立てばパット両手を広げたので、何事かと見れば手打式だと、ハイ、シャン シャン シャンと手を打つ。今まで山頂に立つて登頂した喜びに握手を交わした事はあるが手打式とは始めてなので一瞬とまどつた。しかしその仕草がとても無邪気なのでつられて一緒に手を叩き喜び合う。今日の宿泊地大弛小屋に着けば自炊である。かなり疲れているであろうが女子の自覚としてかあと片付けに精を出す。実際雪解け水での洗ひ物は手が切れそうであつた。いいよやるからと言え、いや私は水の冷いのは平気です。戸塚は水道の水

がとても冷いから慣れてます。と変な言訳をして(湯沸器が家にあるのに)一生懸命をつかつてやるのにはいじらしい。いつまでも純真であつてほしいと思う。

夜の小屋の混雑は想像を絶した。私達は早めに寝たのだが遅くに到着した登山者がどんなに困るかわからないので、寝返りどころか足を縮めたらもう延ばせなくなってしまう。キュークツさで、これなら座っていた方がどんなに楽だろうかと本気で考えた程である。隣に寝ていた彼女が時々、イタイ、イタイと言っていたが確にまともな人間ならとても眠る状態ではなかつたと思う。(朝になって彼女に言わせると私はイビキをかいていたようだ)夕方から降り出した雨が一晚中音を立てて降り続く。明日の行動をどうするか、おそらくリーダーもその事を考えて眠れなかつたと思う。エーコちゃんは一入娘だという。まず帰る迄は大変心配しているであろうお家の方と思われる。連日新聞を賑わしている道難記

事に全神経を集中し吾が手のいない夜ばどんなに寂しく眠られぬ思いでいるかと思えば絶対に予定の日には帰らねばならぬと思う。すべては明日の天気とリーダーの考え次第だ。悪かつたら逃げるをメーにするでしょう。雨の上るのを神に念じて

祈りが通じたのかあれだけ降った雨も朝は上り元気に国師から甲武信へと歩く。今日は昨日とつて変り全員快調、リーダーの指図通り歩く。快調に歩き過ぎたせいか水師へ甲武信の手前のピークの登りで役々のスピードがグンと落ち、吐く息も荒くなる。ファイト、ファイト、頑張れ、頑張れと声を掛ける。

その度になぐとなぐって頑張る。しごくという事は嫌いだ。本来山は楽しむものだから、しかし登山が人生とよく例えられるようにここが忍耐だ。(役々の目は美しくしかった。本当にバテれば目があがってしまふものだ。そうなたら休ませなくてはいけないのだ。女性とは別として山仲間には長男或いは一人息

子が多い。それは親からいつ迄も干渉され依存心の強い性格に自分自身反撥したい現れだと思ふ。実際登山とは自分しか頼れるものがないしこれ程全力を出し自分の力を試す機会はないと思ふ。それから寂しさもある。その寂しさをやさしく慰めてくれるのは大自然、土から生まれ又いづれば土に戻らなければならぬ人間の宿命としてこの自然に接するといふ事は私達にどんなに慰めとなるか知れない。

登りの苦しい時はああ山なんか来るのではなかつたといつても思ふ。これがお金を得る為の手段であつたなら、とても私には続かない。このせちがたない世の中に無償の汗、それがこの美しい大自然に包容されてどれだけすかすかしく感じられるか役々にわかつてほしい。そしてその玉の汗が将来必ずあなたに役に立つに違いない。苦しい時があつたら思い出してほしい。この苦しかった登りを、そして一歩く力強く確実に登り切つた事を、この自信は将来の生活の大きな支えになるに違

いない。あとで私が参加する事になつて良かったと言われ内心いい気持ちになつたのだが、その理由が、だって強い人はかりで心配だつたけれど久保田さんに行けば大分楽になるわとわ全くさえない。帰ってから久保田さんは余裕があつたと言われたが私もバテていたからファイト・ファイトと声を掛けたのだ。勿論

心配だつたけれど久保田さんが行けば楽になるって全くサマエイ



彼を励ます為の掛け声ではあつたが、半分は自分自身への励ましの意味でもあつたのである。それから皆がどれだけ励ましの声を送っていたかという事も、水師の登りでは先に頂上に行った佐次さんが荷を背負いに戻って来てくれたし、でも私は彼女に頑張らせた。その一瞬だけは根めしく思つたかも知れない。しかし自分の力で最後迄頑張つて来た今その充実感を味わっていると思う。やっこの思いで頂上にたどり着くと竹田さんがあなたの大好物のレモンを切つて待っていてくれた。そして口には出さなかつたがリーダーの健さん

が一番心配していたという事も。

又三日目は雁坂峠への予定を変更して十文字峠→戦場ヶ原へと下つた。戦場ヶ原に降り立てば唐松の新芽と緑の芝草と白樺の林が適度に配されて大変美しかった。彼れも無事山旅を終えた満足感とぞろ／＼家が恋しくなつたのかお母さんでとつてもいいな。家のお

母さんすごくいいと言う。母親は有難いものと相場が定まつているのになにをいまさると、いつもはいいいと思はないのと聞けば、はい全然そう思はないと言う。一時の感傷でそういう気持ちになつたのかといえ、そうではないと思う。たとえ三日間という短い期間ではあつたが家を離れて遠くから日々の生活を振り返り考えてみるのも大切だと思つた。いう事で成長していくのだから。

内田栄子さん、山登りを今後も続けるかも知れないし、或は今日限りで止められるかも知れない。しかし今回の山行があなたにとつ

て今後の人生に於て、どれだけ勇氣と希望を
与えたか計り知れないものがあるような気が
してならない。

そして山行を終えた喜びは山から帰ったそ

山に關する章

土口 岡 信子

やっと二人になりました。静かな美しい音
樂が流れていますね。あなたは今お暇？　じ
やあ私の一人言に耳をお貸し下さい。

○浅間山での会話から

「苦しい登りの時Yさんは何を考えている
？」「そうね、私は知らない間に一、二、
三……と数を数えているわい。」「それが一番
いいんだって。一から数えて百までいったら
前の景色を見る。千までいったら後を振り返

の日ではなく、一日、二日、三日と日を経る
に従って強くなるという事も知るだろう。

昭和43年　5月5日記

る。つまり樂しみを作っておく事だ。」

後で思い出した事です。がもう一つ常に考へ
る事がありました。それはこんなに一生懸命
歩いているのにどうして前との間隔が開いて
いくのだろう。やっぱり歩幅のせいかしら、
抵抗を感じます。

○最近山を歩かれるようになった方に

一年前まで私は山は夏休みを利用して行く
のだと決め込んでいました。この考えを改め

たのは去年の3月26日、今年になって山を歩くのは十何回目だ。」と言う人の言葉を聞いてからです。あなたも今から考えを改めて下さい。少くとも月に152回は歩くべきですよ。

○高橋幸治主演のあるテレビドラマ

山男にとつて恋人は山、女性は一男さんなんですって。山男を好きになつた方どういたしましょう。彼にそつと聞かれてみたりけれど、こかくって……。

○新ハイという名のお城

ある日の日記を南くと二

んな事が書いてあります。

新ハイに在籍している

人がこの存在をどの程度

に考えているかは知らない。

しかし誰にとつても大切な

所には違ひなからう。私にとつても大切な所なのである。(中略)



誰でも逃げ道というもの在必ず一つは持っている。自分の部屋を持っている。スポーツが出来る、音楽、絵、本、秘密の何かがある……私の現在の逃げ道は新ハイと言つても良い。つらい時新ハイがあると思えば心が休まる。つまり新ハイには山という隠れた存在があるからかもしれない。一人でさびしいと感じた時私を慰めてくれるのは新ハイの存在だ。(中略) 私は新ハイというお城にいる限り守られてゐる。何にも負けはしない。今の私にとつて一番大切なのはこのお城なのかもしれない。(42年11月)

○山は少し位苦しんだ方が鍛えられるのかもしれない。でも私は楽しみながら登りたい。だからゆっくり歩きます。

WさんとSさんに質問します。「あなた方は早く歩いてゐる時の方が楽しいですか。」

○会社の書庫の棚に登るのが得意です。

「手二本と足二本、四本の内三本は固定し一本だけ動かす。二本一組に動かしてはいけない。」「遠次郎次でのりさんの言葉を思い出して出しなから書庫の棚に手をかけ足をかけるのです。」

「誰かさんは山から帰った時山へ行つて損をしたと思うそうです。でも私は一度もそんな事を思つた事ありません。私は山へ行くために一生懸命仕事をしています。」

のこマーシャル

世界の三大聖業をご存じですか。それは医者と弁護士と生命保険セールスです。医者は病人を救い、弁護士は罪人を救い、生命保険セールスマンは一家の経済を救います。

私の会話は「あなたは生命保険に加入していますか。」「あなたは山が好きですか。」「この二つの言葉から始まります。」

そして「まだ加入してない」と答えたら生

命保険の必要性を説き入れてあげる義務と責任を感じます。それからは「まだ山へ行った事がない」と答えたなら「じゃ今度一緒に歩きましょ」といふ事になる。同様のすべでの仲間、山の良さを教える山を歩く機会を与える義務と責任を感じます。

夜も更けました。続きは又の機会に聞いて下さい。

健感

浅井俊明

(一)

山へ行くのにはなんと障害の多いことか。まず最近では、山へ行く気がなかく、起らぬ。以前はどこでも登りさえすれば満足でやたらと暇があればかけたものだ。しかし、今や

老境に入ったせいかわらぬが、どこでもよいというわけには行かず、人があまり行かず、登りやすいが、汽車は走まない等の条件がそろっていないと出かける気がしない。こうして、一たん足が遠ざかってくると、出かけるのがおっくうになるし、山のニューースも入ってこなくなるし、山の友達とのつき合いも少くなるしということだ。山へ行く気はあっても、それにより足はさらに遠ざかるというた悪循環がもしれんわ。循環をくり返すこととなるのである。

運動車のラッシュでもみくちやにされながら考えた。とかく山へは行きにくい。

朝は朝寝、夜は夜寝を仰ぎつつ、ラッシュにもまれ、職場でこき使われ、あびく

に日月とくりや、たまの休みなら家でごろ寝をするのが最高ということになるのは当然だ。山へ行くには、まず金と暇。金は天下のまわりものというが、なか／＼我輩



のところがはまわってこない。やつと、組合ががんばって給料が上がったと思ったら、汽車賃、宿泊料はそれ以上に上ってるといった具合だ。月給倍増というえらい人の云うことをきいてたら、物価ばかり上ってしまった。どうも、えらい人のいうことを信じているとんでもないことになるというのに今頃やつと気がついた。我輩の頭は相当に古いようだ。さて、ちつとはましな山へ行こうとすれば二・三日休みにやらぬ。この休みがとりにくいときで、我輩はつくづく感心するのだ。なんて皆働くんだろうと思う。全く働くことが趣味みたいな人が多い。そこで、我輩の如き生来のなまけ者が休みをとろうとすると極めて目立ってしまう、休暇願いを出す度に上役がじろりということになってまことにやりにくい。

(2)

先日、やつとこのことで休暇をとり、毎月給から汽車賃をひねり出して甲山へ出かけた。

まず、汽車の混み具合にびっくりした。汽車
って尤ものはなんであんなに混むんだろうね
汽車へ乗るたんびに、なんて日本は人が多い
んだとつくづく思うね。都会でうんざりする
ほどの人ごみ、山へ行っても人ごみじゃ、こ
りあ収められないね。

駅前から山原までロープウェイができてい
るではないか。これでは馬鹿らしく歩いて
登る気にはなれぬ。そのうち、日本中の山々
はロープウェイと自動車道路で埋ってしまう
のではないかな。ロープウェイの山原駅では
耳が痛くなる程大きくモンキーズだかイカレ
ターズだか知らぬがレコードをかけている。
あれは一体どこの国の歌なのかね。どうも我
輩は、長髪と毛虫は好かんね。長髪よりもま
だ「ボロ」は着ても心はニシキイエツメの
方がましだ。さすが天下の名勝、国立公園だ
けあって人向ばかりでなくハエまでがこの山
を、お気に召して群がり集まっている。

なんでわざわざ金と暇を使って遠くのこん

な山まで来たのだろう。もう山へは来るまい
などと歸りの汽車でつくづく思うが、一ヶ月
もすれば、再びのこくと山へ出かけること
になるのである。

大和路を

訪ねて



△今川勝子

去る三月十六日から春分の日迄、親戚の家
を訪向がてら奈良を歩いた。

三月とは云えまだ肌寒い横濱駅の夜更けの
プラットホームで待つこと一時間半。空は全
くの悪天候、山雨ののちあられが降ってきた
りして全然ついていない。や々と乗車。

車中で明け方ふと外を見るとあたり一面雪
で真白、「これはすばらしい、雪の大和路を

惨けるなんて……と思いつらまたうとくして奈良駅についた時にはお陽様がカンク照る。でも雨よりは良いと思ひ、古風な造りの駅舎前をブラ／＼した後、平城・浄瑠璃寺めぐりのマイワロバスに乗りこむ。日曜と云うのに他のコース程乗客は多くない。近代的な県庁前を通りバスは一路大和文筆館へ。ここは近鉄の記念館で古い工芸品がずらりと陳列されていた。茶碗・鉢・花器等著名な作家のもので興味深かった。

次に面大寺へ。ここは昔は東の東大寺に對し面の面大寺という二とで並び称された程の大寺だとの事だが、多くの戦の折、大部分が焼失してしまい、今は寺内に掲げてある一枚の見取図によつて、往時をしのぶ他無い。

四月中旬に大盛茶会の催しがあるという二とだったか、早すぎて残念だった。

バスはその名もゆかしい秋篠寺へと向う。このころ物音がち／＼き始め、春の初めの大和路を歩いていると実感が湧きとても嬉しいか

った。秋篠寺では、我國唯一の伎芸天がずばらしく美しかった。首から上の部分は天平時代下の部分は鎌倉時代に補修されているといえ、ちよつと首をかしげた立像は、我々に微笑みかけているようであつて見えてもあきなかつた。是非共再訪したいお寺である。平城の最後は尼寺法華寺へ。ここも昔の面影は全く無いとの事で本堂正面に安置された十一面觀音立像の包容力ある姿や「入口入道の恋」で有名な横眉のひっそりとした座像がいかにも尼寺らしく感じられた。

浄瑠璃寺は期待していた吉祥天女像が見られず（年二回しか開扉しないとの事）残念だったが、本堂にずらりと並んだ仏像の夫々異なつた顔や手の表情が興味深かった。外は雪が一層ひとくなり肌寒かつた。一路バスは奈良駅へ。解散後、興福寺の五重塔を横に見て奥直ぐ国宝館へ。修学旅行の折、印象に残つた阿修羅像に会いに……やはり良かった。学生時代に見た時けたたけ美しいと思つた

時が、今日は美しき初夏とて、最もいいものを感じ、それを奈良の寺歩きの日、終つた。三日目に、ついでには、新緑会であつた。書いて見たら、思ふやうな感じだ。

青年時代

竹田 明

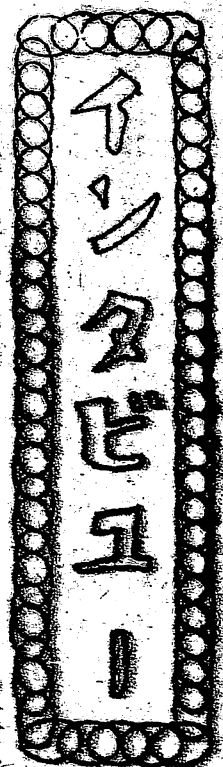
青年という名で呼ばれてゐる私達は、いかに考へ、いかに行動したらよいだろうか、それは誰しも考へなければならぬ問題だ。私達の年代に直面する問題は多くの共通点を持つてゐる。現在の仕事のこと、将来の計画、グループ活動のこと、又異性に対する考へ方、これらは誰しも行きあたる問題だと思ふ、これらのことを真剣に考へなければ、良き年代を無駄に過ごしてしまふことになる。私達

の年代こそ多くのものを吸収する可能性は富んでいる。この時に学びとつたものは将来必ず自分のためになるということば疑う余地のない程明白ではないだろうか。私達の年代になつたらゆるい自信をもたねばならない。そしてそれにもとづく将来の計画を立てること、希望ましいと思ふ。そしてその計画が出来たら達成出来る様着実に実行に移す様、こころがけるべきであらう。人間としての意味はそんなところにあるのではないだろうか。それらの多くの問題の一つに異性に対する問題がある。異性に対することといつても必ずしも恋愛とはかぎらず友情の域を脱しないものもある。しかしそれらは多くの喜びと悩みを与えることに変わりはない。恋愛はあえて恋愛という言葉を使う、同性の友情を破壊するということとはたしかにありうることと思ふ、しかしこれらは非他動的な作用がなしているのではないだろうか。それはその人達にとつては当然のことといえるかもしれない。し

かし私達の年代には若さから来る感情の力が
理性を圧倒してしまう事にあるらしい。感情
という事も大切だが理性とのバランスを保た
ねばならない。僕は決して恋愛が不真面目と
いうのではない。しかしそれに依つて友情を
きずつけられる様であつてはならないことは
もちろんである。それには今書いた様に排他
的な感情をおさえるだけの理性を働かせるこ
とだと思ふ。そしてそれらは必然的に異性を
理解できるものとなるだろう。愛情は一種の
心理であつてみれば不変のものではない。青
年時代の感動は年老いては味かえないかもし
れない。良き青年時代を送ることか良き大人
になる最大の原因であるときいた事があるが
うなづけないこともない。ともあれ排他的に
なりがちなものを理性をもつてセーブするこ
とは決して不可能ではあるまい。俗にフィーテ
ン、ヒーピーといわれている者の行動、その
行動に理性というものがあるだろうか。まし
てあるまい。それは自己表現の強い欲望の現

われであるかもしれない。しかしその人達は
誤った判断をしているのではないか。その行
動は感情のままであるとしが思えない強いて
いうならば本能的欲望のままの行動である。
そしてそれに満足しているならば考えなおさ
なければならぬ。瞬間的な享樂にのみとら
われることばかりに無意味であるか云うまで
もあるまい。ここにあげた瞬間的な享樂とは前
後のみさかいのない行動でありその持つべき
楽しむ行動である。それは当然反省などとい
うことはない従つて進歩もない。もちろん得
る前はツイ。むしろマイナスな面が多い。理
は自分らの行動を批判できるだけの理性を、
そして判断力を養ふことに健康的な恋愛が形
成される原因があるように思われる。それは
恋愛ばかりではなく自分の将来の計画のため
にも、そして現在私達の持つ思索をより健全
にするためにも有意義であると思われる。





- 1 最初に登った山
- 2 最も印象に残った山
- 3 一番好きなお山
- 4 今後登りたい山
- 5 今後何年位山へ行きますか
- 6 山以外の趣味・特技

浅井俊明

- 1 丹沢路ア岳
- 2 丹沢ミツ峰
- 3 面丹沢
- 4 鳥の駒山
- 5 四十年
- 6 水行

- 1 大山
- 2 山奥
- 3 白馬岳、早池峯山
- 4 10年余 寝いものでも寝
- 5 山以外
- 6 手芸

足立又子

手芸

佐藤清人

- 1 赤彦山
- 2 甲武信岳
- 3 南アルプス
- 4
- 5
- 6

- 1 奥入道群峰
- 2 碓氷峠
- 3 三千以上の山
- 4
- 5
- 6

石井春男

今川勝子

- 1 信州飯綱山
- 2 磐梯山
- 3 富士山へ遠くから眺めて
- 4 ハケ岳、白馬
- 5 すべての事情が許す限り
- 6 何年でも……

茶道と普通の旅行

内田栄子

- 1 入笠山
- 2 入笠山
- 3 入笠山
- 4 レパートリーがせまいため
どの山も登りたい。
- 5 5ないし7年間は山を登り
つづけたい。
- 6 将来、余暇をみつけて「茶
道」をやってみたい。今は
時に筆記するものなし。

蒲谷弘子

- 1 富士山
- 2
- 3
- 4 白馬・守産大良山
- 5 45年位歩けるかぎり
- 6 読書・手芸

神谷和雄

- 1 富士山
- 2 飯豊山
- 3 単独の山は分らない。地
域的に東北・越後の山。
- 4 平ヶ岳・北海道の山
- 5 分らない
- 6 スキー、スケート、麻雀

川村ふじ子

- 1 丹沢
- 2 丹沢に一度しか登ったこ
とがないので丹沢です。
- 3
- 4 出羽三山
- 5 行けるかぎりずっと
- 6

久保田治

- 1 大山(丹沢)
- 2 笠が岳(北アルプス)
- 3 笠が岳(北アルプス)
- 4 平が岳
- 5 出来る文
いろうく
- 6

文井藤隆子

- 1 大山
- 2 雲の平
- 3
- 4
- 5
- 6 読書

針木 国文

- 1 尾瀬
- 2 ス住高原
- 3 南アルプス
- 4 幌尻岳
- 5 2、3年
- 6 読書

竹田 明

- 1 大菩薩峠
- 2 白馬岳
- 3 富士山
- 4 南・中央アルプス
- 5 穂高・上州武尊山
- 6 何年でも、

福原 ミツイ

- 1 おおぎ山
- 2 丹波
- 3 三ツ峠
- 4 定の自由がきく向
- 5 三ツ峠
- 6 三ツ峠

吉岡 信子

- 1 大山
- 2 北アルプスへ雲の
- 3 平く高天ヶ原と野
- 4 口五郎
- 5 答に窮します、み
- 6 山を選ば程まだ歩

関野 昌

日本の切手収集

山崎 由利子

- 1 丹沢検洞丸
- 2 最初に登った北アルプス(表銀)

- 1 中山一重
- 2 丹沢大山
- 3 表銀座(槍ヶ岳)
- 4 奥秩父
- 5 南アルプス南部
- 6 身体の自由のきく限り

- 1 まだ山をあまり知らないのでわかりません
- 2 静かで美しい山
- 3 これから先山へ行きたい気持ちにかわりがないかぎり行きたいと思ひます。
- 4 書き事、書く事、読む事、

- 1 大山
- 2 北アルプスへ雲の
- 3 平く高天ヶ原と野
- 4 口五郎
- 5 答に窮します、み
- 6 山を選ば程まだ歩

- 3 北アルプスの山々
- 4 山へ行かれる三要素
- 5 (金・暇・体力)十
- 6 山へ行く気持ち??、

- 3 奥秩父
- 4 南アルプス南部
- 5 身体の自由のきく限り
- 6 スポーツならなんでも、

- 4 静かで美しい山
- 5 これから先山へ行きたい気持ちにかわりがないかぎり行きたいと思ひます。
- 6 書き事、書く事、読む事、

- 1 大山
- 2 北アルプスへ雲の
- 3 平く高天ヶ原と野
- 4 口五郎
- 5 答に窮します、み
- 6 山を選ば程まだ歩

- 6 卓球、その他いろいろ、

- 6 スポーツならなんでも、

- 6 静かで美しい山
- 5 これから先山へ行きたい気持ちにかわりがないかぎり行きたいと思ひます。
- 6 書き事、書く事、読む事、

- 1 大山
- 2 北アルプスへ雲の
- 3 平く高天ヶ原と野
- 4 口五郎
- 5 答に窮します、み
- 6 山を選ば程まだ歩

浅井俊明

治

田

保

人

1962/12

子唐

町

田

大田

No 2093

大田

子

田

子

和

子

子

子

子

熊谷

石

井

春

男

神

谷

和

雄

有

佐

木

美

智

福

原

子

子

子

△云報又贈御礼

いつも皆様方の力作をお送りいただき、ありがとうございました。皆様方の力作をお送りいただく度に、当支部ももっともっと前進しなければと思います。

これからも私達が楽しい山旅を続けてゆけるために、皆様方のよきご指導をお願いいたします。

(順不同)

- ◇ 太田支部 “通信” 4/5/5
- ◇ 相模原支部 “通信” 4/5/5
- ◇ 井の頭グループ “会報” 4/5/5
- ◇ 千代田支部 “支部報” 4/5/5
- ◇ 城北支部 “ニュース” 4/1・3・4/5
- ◇ 川崎支部 “支部報” 4/5/5
- ◇ 奥武蔵支部 “はんのう” 4/5/5
- ◇ 葛飾支部 “灯” 4/5/5
- ◇ 埼玉支部 “さいたま” 9号

あとがき

気軽に編集を引き受けたのは良かったが、竹田氏が山行と例会のたびに皆んなに呼びかけたのでそく／＼原稿が集まり、こいつはエライ事になった。竹田氏を先頭に久保田夫妻・鈴木・石井・吉岡・渡辺・内田さんが忙しう日曜日をさいて印刷に手伝いに来てくれたのでたすかった。次号は誰が編集をするか知れませんが、一人一編ずつ出して編集者に音を上げさせてあげましょう。

しだ、オ19号

発行・昭和43年7月10日

新ハイキングクラブ

横浜支部

横浜市中区初音町の19(影山方)

編集者・関野 昌

